

# レミリアの奇妙な冒険

龍桂

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

デイオと一緒に吸血鬼化済みの女の子がジョースター邸に来る話。

目 次

侵略者デイオと来訪者レミリア	
東洋の毒薬	
ジョースター邸の死闘	
ホワイトチャペルでつかまえて	
馬車の音、夜の騎士	
戦闘舞踏	
東方より来たる	
決戦のとき	
エピローグ	
	84
	75
	64
	53
	44
	33
	23
	12
	1

# 侵略者、ディオと来訪者レミリア

「いつか勝てるようになつてやる！」

喧嘩で得た生傷に顔をしかめながら、ジョナサン・ジョースターはそうつぶやいた。喧嘩相手は何の関わりもない少年二人で、同じく何の関わりもないエリナという少女を助けるために自ら喧嘩を吹つかけたのだが、力及ばず逆に叩きのめされてしまったのである。

なぜそんなことをしたのかと人に問われれば、彼は迷いなく「紳士とはそういうものだから」と答えていただろう。負けると分かついても、戦わなければならぬと感じたときにはどんな相手とも戦う勇気をもつた少年だった。

彼が自宅——伝統ある貴族、ジョースター家の屋敷として有名だった一に帰つてくると、家の前に見慣れない黒塗りの馬車が停まっていることに気がついた。客人だろうか——ジョナサンが怪訝に思つていると、ドアが開いた。

大きなカバンが地面に投げ出された。次いで馬車から軽やかな足取りでおりてきたのは、金髪の少年だった。端正な顔立ちではあるが、目だけはぎらぎらと光つている。

(…そうだ、思い出した。今日はお父さんの二人の恩人の息子と娘を引き取るという話だつた)

ジョナサンは記憶をひつかきまわし、二つの名前のうち一つ——ディオ・ブランドーという名前を探し当てた。そのときちょうど、ディオの方もジョナサンの存在に気づいたようだつた。

「君はディオ・ブランドーだね？」

「そういう君はジョナサン・ジョースター」

「みんなジョジョって呼んでるよ…よろしく。ところでもう一人来るつて話だけど」

「ああ、それなら隣にいた彼女かもしねないな」

ディオが出たところとは反対側のドアがゆっくりと開いた。ジョ

ナサンが見守つていると、その人物はおそるおそるといった様子で外へ足を踏み出し、傘を差した。

もう一人の来訪者は青がかつた髪に赤い目をもつた少女だつた。こちらもディオに劣らず顔は整つていたが、その肌は青白い。身体が弱いのかもしない。少女はジョナサンとディオを見つけると、声をかけてきた。

「私はレミリア・スカーレット。貴方が：ジョナサン・ジョースターかしら？」

「ああ。よろしく」

ディオはジョナサンと同じくらいの歳だが、レミリアは一、二歳年下らしかつた。

「私、身体が弱いから太陽の光に当たれないの。：：傘を差したまま言うのは失礼かもしれないけど、どうぞよろしく」

レミリアが薄つすらと微笑を浮かべると、ジョナサンはレミリアの笑みに本能的な不気味さを感じた。が、すぐに頭を振つてそんな感覚を頭から追い出した。

（……勝手にそう思うのは失礼だな。紳士失格だ）

内省しながら手を差し出した時、きやいん、という犬の鳴き声と鈍い音が聞こえてきた。はつとして振り返ると、ジョナサンの「友達」である愛犬、ダニーがディオに頸を蹴り上げられていたのである。

「何をするだアーッ！ 許さんツ」

叫んだジョナサンを、レミリアが後ろから制した。

「ひよつとしたらディオは犬に怯えたのかもしれないわ。あの犬はあなたの？」

「友達なんだ！ ダニー！ 大丈夫か！」

ジョナサンが駆け寄ろうとしたとき、その父親——ジョースター卿がやつて來た。

「一体何の騒ぎだ？」

「ディオくん。君の父親には世話になつたね」

「いえ……むしろ僕の方が感謝したいくらいです。貧民街出身の僕にこれだけのことをしてくださつてくれるとは」

「レミリアくんも。ご家族の件は本当に残念だつた」

「確かに寂しいけれど、ジョースター卿、新しい家族と出会えたのは幸運でしたわ」

デイオはジョナサンの父親——ジョージ・ジョースター卿と話しながら、その場にいる全員をつぶさに観察していた。

まず、ジョージ・ジョースター。彼の機嫌を損ねるのはよくない。とはいへ、さきほども「突然犬が走つて来たのに驚いた」というデイオの嘘を信じてしまつたことから、ちよろい相手であることは分かつた。温室育ちの貴族らしい間抜けである。

そしてジョナサン・ジョースター。彼も父親と同じく間抜けなところがあるが、こちらには威圧的に出た方がいいだろう。いずれジョースター家の財産の相続から蹴落とさなくてはならないのだから。ダニーの件でデイオにはいい印象を抱いていないようだが、知つたことではない。

最後にレミリア・スカーレット。名家の生まれだそ�だが、屋敷の火事で両親を失つたのだという。しかし彼女の父親はジョースター家を経済的に援助したことがあつたため、その縁でジョースター卿が引き取ることにしたのだという。

病気がちなので競争相手としては心配しないでいいだろう。邪魔になれば父親——ダリオ・ブランドーにしたように、毒を盛つて病死に見せかければいいだけの話である。レミリアはどうにもデイオに対する感情が読めないが、さほど問題ではない。

「来たまえ一人とも。部屋に案内してやろう」

適当に返事をしているうちに、いつの間にかジョースター卿の話は終わつていた。ジョースター卿はロビーを歩いて階段へと向かつていた。

デイオがそれに続こうとしたとき、ジョナサンがカバンに触ろうとしていたので適当に蔑みの言葉をくれながら手首を軽く捻りあげ、肘鉄を喰らわせる。

(ジョースター家を乗つ取るために、コイツの心は折つておかないとな)

「これからも僕の持ち物に触るなよ」

そう言い捨て、ディオはジョースター卿の後を追つた。

「……めんなさい、かばんが重くて階段を上れないの。持つてくれない?」

「あ……うん、わかつた」

後ろからレミリアとジョナサンの話す様子が聞こえてきた。今的一部始終を見ていたにもかかわらず、レミリアの声には同情も戸惑いもなかつた。ジョナサンとディオの間のいざこざには無関心なのがもしけない。

いいように使われているジョナサンの姿を想像して、ディオは片頬に歪んだ笑みを浮かべた。

レミリアは自分の部屋へ案内してもらい、荷物を運んでくれたジョナサンにお礼を言つた後、疲れたので少し休ませてほしいとジョースター卿へ頼んだ。

「慣れない旅で疲れたろう。存分に休みなさい」

「お言葉に甘えさせていただきますわ」

レミリアはベッドに座ると、ほうと安堵のため息をついた。

(今日は、長くいられそうね)

レミリアの姿を見た人間は、彼女の年齢を14、5くらいと推定するだろう。しかし実際のところ、彼女は1500年代にロンドンで生まれているのである。なぜそれだけの間生きていたのか。結論から言つてしまえば、彼女が吸血鬼であつたからである。

1521年にアステカ帝国が滅びると、スペインを通してメキシコから多くの金銀財宝がヨーロッパへともたらされた。レミリアの家ースカーレット家はメキシコの貿易品を扱つており、自然とレミリアとその妹はメキシコからの品に触れる機会が多くなつたのである。その品の中に、二つの石仮面が混じつていた。

ある日レミリアとその妹が、父親の持つて帰ってきた石製の仮面をかぶつてふざけていると、どうしたわけか妹がころんと手のひらをすりむいてしまった。当然だが、石仮面で視界が制限されていれば転びもする。妹は泣きながら石仮面を外そうとした。

血に濡れた手で触れた瞬間、骨針が飛び出て妹の頭をめつた刺しにした。果然としているレミリアの目の前で、妹はゆっくりと倒れた。レミリアが妹を介抱しようと駆け寄ると、そのときにはすでに吸血鬼と化していた妹に殴り飛ばされた。折れた肋骨が肺に突き刺さり、レミリアは吐血した。もちろん吐いた血は石仮面へ付着し、同じように作動した。

かくして二人の吸血鬼が生まれてしまったのである。両親に捨てられた姉妹はヨーロッパの各地を転々としていたが、ある村で行われた魔女狩りのときに離れ離れになってしまった。

妹と別れたあと、レミリアはその後も吸血鬼であることはひた隠し、鍊金術師の真似事や貴族の家庭教師をしながら旅をしていた。一か所に留まると歳を取らないことがばれてしまうので、定住はしなかつたが。

もちろんジョースター卿が恩義を受けた家族とは血は繋がっていない。子のいない貴族夫婦がいたので養子になっていたのである。人のいい夫婦でレミリアも気にいっていたが、不幸な事故で二人が死んでからはほとんど思い出すことはなかつた。

(この家は静かでいいけれど…あの二人はちょっと気になるわね)

ジョナサンとデイオ。ジョナサンは貴族のぼんぼんらしい甘つちよろさがあるが、稚拙ながらも紳士たらんとする姿勢は好感がもてた。デイオは貧民街出身というだけあってぎらぎらとした野心を身に纏つており、どうも気に入らない。

(まあ、少し占つてみようかしら)

レミリアは自前のタロットカード——占星術師に弟子入りしていたころに手に入れたものである——を取り出してシャツフルした。

カードを1枚引いて見たあと、片眉を上げて再びシャツフルし、引き直す。それを数度繰り返して、ため息をついた。

「……ひよつとして私、面倒ごとに巻き込まれたのかしら？」

二人の運命、そしてジョースター家の運命。何度も占つても出てくるのは正位置の塔。<sup>タワー</sup>意味は「破壊、破滅、惨劇」だつた。

デイオとレミリアが来てから、ジョナサンの苦しい日々が始まった。デイオは何かとジョナサンに嫌がらせをしたり非友好的な態度をとつてくるうえ、あつという間に勉強やマナーを理解してしまったため、ジョースター卿はジョナサンに厳しい態度をとるようになつていたのだ。

レミリアは病氣がちで昼は自分の部屋から出てこず、あまり姿を見かけたことはなかつたが父親に言わせれば、「完璧な淑女」であり、貴族らしい教養があるらしい。

「作法がなつとらんぞッ 作法が！」

ひつくり返つたグラスがテーブルクロスに大きなしみを作つたとき、ジョースター卿はそう言つてテーブルに拳を叩きつけた。

「もういい、ジョジョ！ お前の食事はぬきだ！」

「ええつ、そんな……」

「デイオを見習え！……もう自分の部屋に帰つてなさい！」

給仕がジョースター卿の指示通りにジョナサンの食器を下げに来たときには、すでにジョナサンはすきつ腹を抱えて自分の部屋へと走つていた。

（父さんは二言目にはデイオを見習え、レミリアを見習えだもんな……きっと僕が嫌いなんだ）

ジョナサンは涙ぐんでいた。誰かと比べられることなかつた今まで、デイオの罵詈雑言を浴びない今までが懐かしかつた。

「あら、どうしたの？」

涙をぬぐいながら歩いていたジョナサンに声をかけたのは、レミリ

アだつた。

「いいや……なんでもない」

泣いているところを見られてしまつたので、ジョナサンはいたさかの気恥ずかしさを覚えながらそう答えた。するとレミリアは、ああ、と納得したようにならずいた。

「さつきジョースター卿の声が聞こえてきたのだけれど……マナーが悪かつたのね？」

「……」

「まあ、確かに作法は大切ね。特にあなたのように紳士を目指してい

るのなら」

レミリアは微笑を浮かべた。しかし空腹のうえにやり場のない怒りと悲しみを抱えたジョナサンには、レミリアがあざ笑つているようにしか見えなかつた。

「放つておいてくれ。それにきみも…デイオや父さんみたいに僕を嫌つてるかマヌケだと思つてるんだろ？」

何を言つてゐるのか分からぬといふ様子で、レミリアは首をかしげた。

「そんなことないわよ。私はデイオよりは貴方の方が好きだし……まあちょっと抜けたところはあると思つてゐるかしらね」

「……やつぱりバカにしてるじゃないか」

やはりこの家には自分の味方は一人もいないのだ。ジョナサンはレミリアと顔を合わせてゐるのが嫌になり、再び駆けだした。

「あ、ちょっと待ちなさい」

レミリアの制止は無視した。ジョナサンは自分の部屋へと駆けこむと、勢いのままベッドに突つ込み、ぐすぐすと泣きじゃくつた。

少しして涙は収まつたが、空腹はジョナサンの思考を悪い方向へとねじまげ、心をどん底へと叩き落していった。

「……ああ、こうやって僕は涙にずぶ濡れになつて死んでいくんだ……でも誰も僕の亡骸を見ても泣いてはくれないんだろうなア……デイオは鼻で笑うだろうし、父さんもため息をつくくらいで…」

そのとき、ノックの音がした。

ジョナサンが口をつぐむと、ドアの向こうからレミリアの声が聞こえた。

「ジョジョ、入つてもいいかしら？」

自分をからかいに来たのだろうか。ジョナサンは真っ赤になつた目をこすりながら答えた。

「……また君か。何の用だい？」

「何の用とは冷たいわね。せつかく貴方のために食事を持ってきてあげたのに」

「えつ？」

ドアを開けて入つて来たレミリアは、ジョナサンが食べ損ねた夕食をまるまる一人分持つっていた。

「それは……」

ジョナサンが驚きの声をあげかけたとき、レミリアは人差し指を唇にあてた。

「内緒よ。私、食欲がないの。……まあ冷めてはいるけど一切手をつけてないから遠慮せずに食べなさい」

「いいのかい？」

「そのために持つてきたんだから。気にしないでいいわ」

先ほどまで悪意に満ちていたように見えたレミリアの顔が、聖母のように見えるようになつた。ジョナサンは自分の腹の現金さに苦笑しながら、感謝の言葉とともに食事を始めた。

ジョナサンが無我夢中で食べている間、レミリアは窓から外を眺めていたが、食事が終わつたとき、ジョナサンのベッドに飾り付けられている母親の肖像に目をとめた。

「あれはあなたの母上？」

「うん。そうだよ。僕が生まれてすぐ死んじゃつたんだけどね」

「……それなら、ジョジョにとつてはジョースター卿が唯一の家族なのね。1人しかいないのだから、大切にした方がいいわ」

そのとき、ジョナサンはレミリアが家族全員を亡くしたという話を思い出した。よく考えれば、レミリアはそれだけの悲劇の後、弱い体

をかかえ、身寄りのない不安にさいなまれていたはずである。それなのにさきほど自分がとつてしまつた態度は、とても紳士とは言えないだろう。

「……ごめん、さつきは気が立つててね。何かあつたら力になるから。

……紳士たるもの、淑女に当たるべきではないよね」

レミリアは、気にしてないわ、とつぶやいてから、ジョナサンの方に向き直つた。

「貴方、やつぱり氣に入つた。デイオみたいな人間はさんざん見てきたけれど、貴方のようにバ・いえ、本当に紳士になろうとしている者は見たことがない……貴方も、もし困つたことがあれば私に相談しなさい」

ジョナサンは、久しぶりに味方となつてくれる人が現れたことに安堵を覚えた。どこか上からものを言つてくるようなところのあるが、それも愛嬌だろう。

「さて、と……そろそろ戻らないと使用人が私の部屋に食器の回収に来てしまうわね」

「食器は僕が持つていこうか？」

「遠慮しておくわ。あなたが食器を持つてるのを見られたらまずいでしょ？」

そう言うと、レミリアは食器を抱え、部屋のドアへと歩いて行つた。  
「今日はありがとう。これからも・友達として、よろしく」

「こちらこそ」

レミリアがバタンと扉を閉めたとき、彼女の身にまとつていた甘い香りがかすかに残つていた。

ある日、ディオはジョナサンの部屋にこつそりと忍び込んだ。ジョナサンはいい懐中時計を持っていたので、それをいただいておくつもりである。この前、ボクシングで徹底的に痛めつけておいたので多少物を盗んでも何かを言つてくる気にはならないだろう。

「ム、見つけたぞ」

きらりと輝く真鍮の懷中時計が引き出しの中にしまわれていた。

「あらあら。ディオ。ジョナサンの部屋を出た。

「あらあら。ディオ。ジョナサンの部屋で何をしていたの？」

するとそこでちょうどレミリアと鉢合わせた。手には広間にかけてある不気味な石仮面を持つている。レミリアは昼間には自室にいることが多いはずなのだが、今日はたまたま外に出てきていたらしい。

「……そういう君だつて、広間にあるはずの仮面を持っているじゃないか。どうしてだい？」

「この石仮面に興味がわいたの。だからジョースター卿に許可を貰つて自室でゆつくり見ることにしたの」

「フン、そんな骨董品、金になりはしないのに……よほど暇なんだな」「ええそうね。……それで、貴方はどうしてジョナサンの時計を持ち出しているの？」

レミリアはじつとディオの返答を待つっていた。

(ち、面倒くさいな)

「借りるだけさ。僕は自分の時計を持つていないんでね」

「そう、ならいいわ。……まあ貴方もジョナサンの友人として、いや、ジョースター家に住む人間として、盗みなんてするわけはないと思つていたけれど」

そのとき、ディオはレミリアの向ける視線が盗人を見るそれであることに気づいた。貧民街でよく向けられた、取るに足らないものを見るような目。ディオはふつぶつと怒りがわいてくることに気がついた。

(このディオをコケにしやがつて……!)

しかし、ディオは激昂しそうになるのをぐつこらえた。レミリアの身体は華奢で、ディオが右ストレートでも放てば容易に倒すことができるだろうが、ジョースター卿や使用人の手前、それはできない。相手がジョナサンであれば喧嘩として片づけられるかもしれないが。「まあいい……じゃあな」

「あともう一つ教えてほしいことがあるのだけれど」

「…なんだ」

踵を返そうとしたディオを、レミリアは呼び止めた。

「今日は早めに学校が終わつたのかしら？ ジョナサンは帰つてないみたいだけど」

「……ちよつと忘れ物を取りに来ただけさ」

「そう。じゃああなたがダニーに猿ぐつわをして箱に入れたのはどうして？」

「なに？」

こいつは、とディオはレミリアを睨みつけた。

「外を眺めていたらあなたがダニーと一緒にいるところを見かけたのよ。犬嫌いのはずのあなたがね。……それにしても、いつの間にそんなに仲良くなつたの？ 焚却炉でかくれんぼなんかしちゃつて。助けるのに骨が折れたわ」

「……見間違ひだろう」

「ふーん、ならいいわ。私はけつこう犬が好きなの。：一生懸命人間に尽くすところが特にね。だからあなたも『ダニーが事故にあわないように』気をつけてあげて」

レミリアはそう言い残すと、自室の方へと引き返していった。それを見送つたディオは、自分の目的を達成するうえでレミリアが思つた以上に邪魔な存在であることを知り、ひとかにある決意を固めた。（こうなつたら、早いかもしれないが、レミリアは始末する。そう、俺のあのカスみたいたオヤジと同じように、毒でゆつくりと殺してやろう）

かさり、とポケットに入れていた毒薬の包みが音を立てた。

## 東洋の毒薬

—数年前—

デイオが東洋の秘薬を求めたのは、彼の実父、ダリオ・ブランドーを殺害するためであつた。ダリオは母の形見のドレスを売つて酒の足しにするような救いようのない屑であり、躊躇はなかつた。

決心を固めたデイオの行動は速かつた。ロンドンの中華街の奥にある秘密の薬屋を探し当てるに、賭博で得た金で薬を買うことにした。

「これを使えば本当に医者に調べられても毒殺とばれないんだな？」  
「ヒヒ、もちろんね。この秘薬、人間の「氣」を濁らせて殺すね。ここ  
の医学じゃ分かりっこないよ」

そう答えたのは、髭と眉が異様に長い中国人だつた。おそらく偽名だろうが、ワンチエンというらしい。妖し気な雰囲気を持つ店内にふさわしく、払拭しがたい胡散臭さを身にまとつてゐる。

「そうですよ。ワンチエンさんの作る薬は効き目がありますからねえ。そこは保証します」

もう一人、中国人の娘がいた。顔立ちは東洋風で、燃え盛るような紅の髪を腰まで伸ばしている。腕のよい薬師が一人いるとは聞いていたが、この娘については何も知らなかつた。デイオが怪しんで黙つていると、娘は何かに気がついたような顔をして、慌てて付け足した。「私はホンメイリンと言います。今はワンチエンさんの薬作りをお手伝いしていますが、いずれ自分で薬屋を開くので、そのときはごひいきに」

「……見習いか」

デイオがそうつぶやくと、ワンチエンはうなずいた。

「彼女、人間の「氣」の流れを見る才能ある。私の跡つげるね」

「……そうか」

デイオは適当に返事をしながら、ダリオを殺した後はワンチエンや

メイリンの世話になることはあまり無いだろう、と思つた。

彼らを頼るのは、誰かを殺すときなのだから。

ジョースター卿とレミリア。今回毒を盛る相手はこの二人だつた。ジョースター卿は歳だから病死してもそれほど不自然ではないだろうし、レミリアは普段から病氣がちなのでなお自然に見えることだろう。二人が死んだ後は、ジョナサンを追い出せばもう問題はない。ダニーを殺そうとした件について、レミリアは「ディオの弱みを握っているつもりなのか、数年が経つた今もまだ誰にもそれを話していくなようだつた。しかしさかディオがその命ごと証拠を隠滅しようと図るとは考えてもないのだろう。

ディオは根気よく二人に毒を盛り続けた。その結果、ジョースター卿はもくろみ通り寝込むようになつていた。

(このディオをコケにする奴は許さん……たとえ女であつてもな)  
ディオはレミリアの食事のトレーに置いてある薬を「自前の薬」と入れ替え、レミリアの部屋をノックした。

「レミリア。入るぞ」

いつも通りカーテンは閉めきられ、部屋の中は暗い。ぼんやりと光るランプのそばで、レミリアは椅子に座り、頬杖をついたまま本を読んでいた。本のタイトルは「東方見聞録」。確かヴェネツィアの商人が東洋の旅について口述したものだつたか。

夜のこの時間はよくジョナサンと話しているようだが、ここ数日ジョナサンは家を空けてどこかへ行つてるので、最近のレミリアは本を読んで過ごしているらしい。

「あら。いつもありがとう。後でおいしくいただくな」

微笑を浮かべたレミリアを見ながら、内心ディオは困惑していた。

(……なぜこいつは死ぬ気配も見せないんだ?)

毒をいくら盛つても効いた様子が無い。ジョースター卿に盛つている量とそう変わらず、また同じ種類であるにもかかわらず、である。

「……どうで、ディオ、あなた東洋への旅に興味はない？」

「東洋？」

「そうそう、私はこの本に書いてある黄金の国ジパング……中華のさ

らに東にある国に興味があるの」

「……どうせ低俗で野蛮な国に決まっている。東洋の国なんてそんなものだろう？」

「そう言うと、レミリアは残念そうにつぶやいた。

「残念ね。私は貴方のために東洋への旅を薦めているのに」

「なぜだ？」

「警察に追われてまでロンドンに居たいの？」

「ディオは気づいた。レミリアがにやにやしながら薬の包みをもてあそんでいることに。

「……それはツ」

「貴方がくれたお薬よ。私は盗人から何かを施されることが嫌いだから飲まなかつたけれど……この前気づいちやつたのよ。確か貴方、ジョースター卿にもこの薬を渡していたはずよね。ジョースター卿の具合だけ悪くなるのはなぜかしら？」

鼓動が速くなるのを感じた。ディオの企てを全て見抜いているらしい。レミリアがこのことを警察に報告してしまえば遺産を継ぐどころか、犯罪者として逮捕されてしまうことは目に見えている。

「フン、人をからかうのも大概してくれ。そもそもそれが本当なら君はもう警察に通報しているだろう？」

「ええ。私は確信が得られるのを待つていてるの。ジョジョがそろそろ戻ってくる頃ね……この薬の正体を突き止めて」

しまった、とディオは思った。毒薬に気づいたレミリアがジョナサンに入れ知恵したのだ。ジョナサンが家を空けているのは、食屍鬼街へ行つてディオが殺人を試みている証拠を持ち帰るため。そしてレミリアが気づいてから素知らぬふりをしていたのは、ディオに対策の時間を与えないため。

「……どうで、ディオ、あなた東洋への旅に興味はない？」

「東洋？」

「そうそう、私はこの本に書いてある黄金の国ジパング……中華のさ

らに東にある国に興味があるの」

「……どうせ低俗で野蛮な国に決まっている。東洋の国なんてそんなものだろう？」

「そう言うと、レミリアは残念そうにつぶやいた。

「残念ね。私は貴方のために東洋への旅を薦めているのに」

「なぜだ？」

「警察に追われてまでロンドンに居たいの？」

「ディオは気づいた。レミリアがにやにやながら薬の包みをもてあそんでいることに。

「……それはツ」

「貴方がくれたお薬よ。私は盗人から何かを施されることが嫌いだから飲まなかつたけれど……この前気づいちやつたのよ。確か貴方、ジョースター卿にもこの薬を渡していたはずよね。ジョースター卿の具合だけ悪くなるのはなぜかしら？」

鼓動が速くなるのを感じた。ディオの企てを全て見抜いているらしい。レミリアがこのことを警察に報告してしまえば遺産を継ぐどころか、犯罪者として逮捕されてしまうことは目に見えている。

「フン、人をからかうのも大概してくれ。そもそもそれが本当なら君はもう警察に通報しているだろう？」

「ええ。私は確信が得られるのを待つていてるの。ジョジョがそろそろ戻つてくる頃ね……この薬の正体を突き止めて」

しまった、とディオは思った。毒薬に気づいたレミリアがジョナサンに入れ知恵したのだ。ジョナサンが家を空けているのは、食屍鬼街へ行つてディオが殺人を試みている証拠を持ち帰るため。そしてレミリアが気づいてから素知らぬふりをしていたのは、ディオに対策の時間を与えないため。

「どう？ 旅に出たくなつたでしょ？……まあぶん貴方にはそんな時間は残されてないと思うけれど」

「……ツ、この女ツ！」

（どこまでも俺をなめているツ！）

怒りが限界に達し、ディオはポケットからナイフを取り出した。鈍色の輝きを見てもレミリアは嘲笑を浮かべたまま気にも留めなかつたが、ディオがナイフを一閃すると、その笑みは凍り付いた。

レミリアの首筋から、鮮血が散つた。首に手を当ててぱくぱくと何かを言おうとしていたが、そのままバランスを崩して床に倒れ伏した。ディオは痙攣するレミリアを見下ろして蹴り飛ばすと、その部屋を出た。

「不愉快極まるヤツを殺せたのはいいが…これはもう収集がつかない」

レミリアを殺したことはいずれ明るみに出るだろうし、ジョナサンが戻つてくれればジョースター卿を殺害しようとしていたことが知られてしまう。警察に捕まらないようにするためには、一刻も早くここから逃げるしかないだろう。

しかし、ここから逃げる、というのはディオの瘤にさわつた。もしもこの事件を完全に隠滅することができたら？ 人知を超える力を手にすることができるとすれば？

そのとき、ディオの脳裏に、あの不気味な石仮面が浮かんだ。

実はディオはジョナサンを謀殺するための道具として石仮面を持ち出し、からんできたごろつきに使用したことがある。ただの拷問器具かと思っていたが、石仮面の骨針が頭に突き刺さつたごろつきは、死ぬどころか凄まじいパワーを得て若返りを果たしていた。

そのごろつきは太陽光を浴びて塵と化した。それによつてディオは石仮面がもたらす力は知つていたものの、太陽の下を歩けなくなるというリスクを考え、手を出しあぐねていた。

「……だが、今はそんなことを言つてゐる場合ぢゃないな」

この館にいる者、追つてくる警察も皆殺しにするような、圧倒的な力がいる。そして石仮面をかぶりさえすればそれはたやすく手に入

るのだ。

デイオは廊下を疾走した。石仮面はジョナサンの部屋に置いてあるはずだ。さらに都合のいいことに、石仮面を作動させるのに必要な血については、レミリアのものが服に付着している。

ジョナサンの部屋に到着し、ドアノブに手を触れた。

「そうだ、まだ何も問題は……」

ない、とつぶやきかけたとき、デイオは後ろからやつてきた大男の存在に気がついた。ジョナサン。すでに証拠は上がっているのだろう、警官たちを引き連れている。

「デイオ……君の服についているのは、いつたい誰の血だ？」  
ジョナサンは、わななきながらそう訊いた。

「ちよつと貴方に伝えたいことがあるわ」

レミリアがそう言つたとき、ジョナサンは妙だな、と思つた。レミリアがわざわざ伝えたいことがある、などと言つたことは今まで一度もなかつたからである。

「どうしたんだい」

「……ジョースター卿の病気ことなのだけれど……おかしいとは思わない？」

「お父さんが？　あれはただ風邪をこじらせただけだろう？」

ジョナサンからすれば、むしろレミリアの方が妙だつた。何年経つても成長した様子はなく、容姿が変わつていないのである。メイドや執事はのんきに可愛いお姿のままだと笑つてゐるが、これも彼女の病弱と何か関係があるのだろうか、と思つていた。

「……私は普段からデイオと医者に薬を貰つてゐるの」

レミリアが机の引き出しから包みをいくつも取り出したのを見てジョナサンはあきれ返つた。

「駄目じゃないか。ちゃんと薬を飲まないから病気が治らないんだろう」

「私はいいのよ。薬なんか飲まなくとも。でも、どうして薬を飲んで

いるのにジョースター卿の方は病氣がますます重くなっているのかしら?」

「……つまり?」

レミリアは包みをジョナサンに手渡した。

「ディオが毒を盛つてゐるんじゃないかつてこと」

「……何を言つてゐるんだ。君は」

声が震えた。まさかそんなことをするわけがないだろう、と思つたが、ひよつとするとディオならやるかも知れないとも思つた。

「……証拠はあるのかい?」

「いいえ。ただ、ジョースター卿のかかりつけの医師に薬を見せたら、どんな効果のある薬なのかは分からなかつたけど、漢方薬の一種らしいことはわかつたわ。そしてそんなものをこの辺りで売つてているのは、オウガーストリート食屍鬼街オウガーストリートにある店だけよ」

食屍鬼街——ジョナサンも噂だけだが聞いたことのあるスラムだつた。呪われた者たちの住まう、忌むべき場所。しかし、そこへ行けば、少なくともディオへあらぬ嫌疑をかける必要がなくなるか、父親の病氣を治すことができるかも知れないのだ。

「……なるほど、よく調べたね」

「私はディオが毒を盛つてゐる証拠を取るためにそこへ行くつもりなの。その間、ディオを見張つておいてくれない?」

「いや……行くのは僕の方だ。君はここに居てくれ」

レミリアの身体が丈夫ではないことは知つてゐる。ジョナサンはレミリアをなだめすかすと、秘密裏に自分だけそこへ向かつた。

ジョナサンが食屍鬼街にやつてきたときにひと悶着あつたが、仲間になつたスピードワゴンという男の案内で、無事に問題の薬屋にたどり着くことができた。そこにいたのはワンチエンとホンメイリンという東洋人だつた。

「私無関係ね。何も知らないね」

「馬鹿野郎、ジョースターさんは命かけてここまで來てるんだ。ちゃんと質問に答えろ!」

ワンチエンの胸ぐらをつかもうとしたスピードワゴンを制止し、

ジョナサンは言つた。

「……質問に答えてくれたら、もし君が毒薬を売つていたとしても僕はそのことを言わない。約束しよう」

「もし答えたら私も見逃してもらえますよね？」

「……ああ」

メイリンはワンチエンと相談していたが、やがて決定的証拠——ディオに、ゆつくりと服用者に死をもたらし、証拠がでない薬を売つたことを白状した。

ジョナサンは警官隊と薬を売つたと自供した二人の東洋人、スピードワゴンをともなつて帰宅した。そして決定的な証拠を突きつけるため、ディオの姿を探していたのだが、ジョナサンたちが見つけたとき、ディオはおびただしい量の血を浴びていた。

「ディオ、それは、誰の血だ？」

「レミリアだ。殺したのさ。このディオを馬鹿にしたからな」  
レミリア。その名が出てきて、ジョナサンは動搖した。死んだ？ 彼女が？

「う、嘘をつけ…」

「喉を搔き切つてやつたんだ。信じたくなきや信じなくともいいぞ、ジョジヨオ…すぐその必要がなくなるからな」

何が起こつたのかは分からぬが、おそらくレミリアはディオの毒牙にかかつたに違ひない。毎晩語りあい、実の妹のように接してきた彼女の死を知ると、ジョナサンの心に、ちりちりと火がともつた。  
「……わかつて いるのか？ 君は殺人を認めたんだぞ」

「ああ、だがもう問題はない」

連れてきた警官たちは拳銃をすらりと引き抜いた。ディオはそれを見てふつと笑うと、なぜかジョナサンの部屋へと入つていった。  
「そいつをさっさと捕まえてくれ！ サツの仕事だろ！」

スピードワゴンが叫ぶと、警官たちははじめられたように走り出し、ジョナサンの部屋に突入していった。残されたジョナサンは、たち立ち尽くしていた。

「遅かった……」

「ジョースターさん。そのレミリアってお嬢さんのことは、残念でしたか……ジョースターさんのせいじゃないですよ」

「いいや、もう少し早く着いていればよかつたんだ！」

ジョナサンが自責の念に駆られ始めたとき、部屋の中からは銃声が聞こえてきた。デイオが抵抗しているようだつた。しかしあの人数の警官隊に勝てるわけがない。デイオが死体となつてあの部屋から出てくるのは間違いないだろう。

「なんの騒ぎだね」

そのとき、杖をついたジョースター卿がやってきた。

「父さん、これは……」

「旅行から帰ってきて、どうして私に会いに来てくれなかつたのかね？」

「それどころじやないんです」

ジョースター卿には、余計な心配をかけさせないために旅行へ行くと言つていたのだ。ジョナサンが何が起きているのかを説明しようとしたとき、これまで黙つていた東洋人——ワンチエンが口をはさんだ。

「よくない気の流れがあるね。早く逃げた方がいいよ」

「サツはお前たちを不問にするつゝてんだろ！ 安心しろ」

「スピードワゴンさん、違います。私たちは、あの男から逃げろと言つてているのです。気の流れが変わりました。おぞましく……そして限りなく邪悪なものに」

メイリンがそう言つた瞬間、怒号や悲鳴が聞こえてきた。銃声も聞こえるが、途切れ途切れになつてている。やがて、ジョナサンの部屋は静寂に包まれた。

「まさか……」

ジョナサンがそう呟いたとき、ワンチエンとメイリンは我先にと逃

げ出した。いまだによく状況を呑み込めていないらしいジョースター卿、ジョナサンと同じく金縛りにあつたかのように立ち尽くしているスピードワゴンのほかには誰もいなかつた。

かつ、かつ、かつと足音が聞こえてきた。ドアを開けて姿を現したディオは、闇の中で鋭い眼光を発し、伸びすぎた八重歯が口元から覗かせていた。身体には先ほどまでとは比較にならないほどの血液がべつたりとついており、歐州の伝説に名を残す怪物を思いおこさせた。

「き、吸血鬼……」

スピードワゴンがそうつぶやくと、ディオの唇が動き、言葉を発した。

「……この力、分かるか、ジョジョ……」

ディオからはすさまじい暴力の気配が立ち昇つており、彼がもはや人ならざる者に変貌してしまっていることをジョナサンは直感した。「……警官たちはどうしたんだ」

ジョナサンが訊いた瞬間、ディオの後ろから続々と人影が現れた。それらは、かろうじて人の形を保つているものの、ぐずぐずと崩れ、萎びた身体に生氣はない。窟んだ眼窩から血走った眼だけを爛々と輝かせている様子は、ゾンビそのものだつた。

「彼らももう……人間ではないみたいだ」

「あれが……警官隊なのかッ！ ディオにやられたら、俺たちもああなつちまうつてことですか、ジョースターさん！」

「……そういうことなんだろうな」

戦慄する2人といまだに状況がつかめていないジョースター卿に向かつてディオは真つすぐ歩を進めてきた。4、5人の屍生人ゾンビもひたひたとその後につき従つてゐる。

「お前たちを皆殺しにすれば、何が起こつたのか知る者はいなくなる…まとめて俺の生命になれ…」

ジョナサンは前へ一步出ると、傍で燃えていた燭台を倒した。あつという間に炎はカーペットから床や壁に燃え移り、炎の壁が出来上がりつた。

「……頼む、スピードワゴン。父さんを連れて逃げてくれ」

「それは無茶だ。あの怪物は警官たちもやられたんだ！拳銃一丁でどうやつて戦うんですか」

「大丈夫だ。必ずデイオは倒す。……父さん、信じてください」

ジョースター卿はジョナサンの眼を見ると、ふつと笑った。

「いつの間にかここまで息子が立派になつているとはな……一つだけ、条件をつける……生きろ」

ジョナサンはうなずいた。一瞬、スピードワゴンは逡巡したがジョースター卿を連れて屋敷の出口へと走り始めた。それを確認して、ジョナサンは前へ向き直つた。デイオはすでに炎の壁の前までやつて来ていた。

「ここで止めなくてはならないんだ。デイオ」

「フン、俺を止める。か。こんな炎、乾いたネズミの糞も燃やせんぞツ！」

ゾンビたちとともに、デイオは炎も意に介さず突っ込んできた。紅蓮の炎が身体を焼き、炙り、焦がす。しかし突進の勢いは止まらない。焼けた皮膚を再生させながら、迫つてくる。

「おおッ！」

とつさにジョナサンは拳銃を抜いて発砲した。轟音とともに弾丸はディオの胸のど真ん中を貫き、後方へと抜ける。が、足止めにもならなかつた。ディオは一気に距離を詰めると、そのままジョナサンに飛びかかつた。

（まずい！）

ジョナサンの脳裏に変わり果てた警官たちの姿が浮かんだ。自分もああなつてしまふのだろうか。父親との約束は。ディオを止めるという目的は、果たせないのか。迫りくるディオの手刀に、思わず目をつぶつた。

「あきらめるなんて、らしくないわね」

がつ、と鈍い音がした。

ジョナサンが目を開けると、目の前わずか数センチのところで、ディオの手が止まつていた。槍がジョナサンの背後から突き出され、

「ディオの攻撃を間一髪のところで制止していたのである。

「貴様は…なぜ生きているツ!」

ディオの声には驚愕の色が浮かんでいた。声で闖入者が誰だかわかつてはいたが、ジョナサンも思わず振り向いた。

「油断してディオに小細工をするチャンスを与えたのは、私の責任ね……ごめんなさい、ジョナサン」

ディオとジョナサンに文字通りの横槍を入れた人物——レミリアの瞳は、炎を映して真っ赤に染まつていた。

## ジヨースター邸の死闘

ぎぎぎ、と嫌な音が柄の中心から聞こえてきた。鋼鉄製の槍が、ディオとレミリアの力を支えられなくなつてはいるのだ。ディオは驚愕に目を見開いていた。

（なんだ、このパワーは？）

吸血鬼と化したディオならば貧弱なレミリアの力など問題にならないはずだ。しかしディオが力をこめ続けているにも関わらず、レミリアの腕はこゆるぎもしない。そもそも、レミリアは失血死したのではないか。

そう思つた瞬間、ふと抵抗が消えた。ジョナサンが下がつたのを見てレミリアが槍を支えるのをやめ、身を沈めたのである。ディオの上半身が揺らいだその刹那、レミリアは体当たりをかました。

気がつくと、ディオの身体ははるか後方へと吹き飛ばされていた。壁に叩きつけられ、起き上がるうとすると口から少し血があふれた。あらが数本折れたらしい。

「レミリア……君は、何なんだ？」

「あなたが対峙している怪物と同じよ。吸血鬼」

なるほど、とディオは納得した。そう考えれば辻褄が合う。レミリアが昼間はずっと部屋に閉じこもつていたことも、致命傷を負わせたはずなのに生きていることも、そしてディオと対等に渡り合っていることも。

「だが、お前からは俺ほどのパワーは感じられないな……」

数秒で腹部に負つた傷を治癒させると、ディオは立ち上がつた。もしレミリアがディオと同じ再生能力を持つのなら、首を切つた時点ですぐに傷を治癒させディオに襲い掛かつたはずだ。それを「しなかつた」のではなく、「できなかつた」のだとすれば？

（そうだ……ヤツの弱点はそこにあるはずだ。消耗戦になれば、俺が勝てる）

「ゾンビども、ジョジョは任せた。俺はレミリアを殺る」

「君がどうしてその力を手に入れたのかは後で聞くことにするよ。とりあえず今は」

「そうね。彼らを斃さないとね。全く、こんな趣味のいい屋敷にあんな下品なものがいることが許せないわ」

「ディオは君と闘うつもりらしいけど」

「それならお望み通り、私が相手するわ。……ジョジョ、紳士なら約束は守りなさいね。あなたが死んだら私の話は聞けないでしよう？」

「ああ、わかった」

ジョナサンがうなずいた瞬間、レミリアはジョナサンを置いて前方へ跳躍した。それに気づいたディオも床を蹴り、両者は空中で激突した。

「WWWRRYY!」

ディオは腕を交差させ、槍の一撃を受け止める。めきめきと骨の碎ける音がディオの腕から聞こえた。が、その刹那、ディオの回し蹴りがレミリアの脇に炸裂した。

吹き飛ばされたレミリアは廊下の窓を破り、屋敷の外へと体を躍らせた。

——渴く。

硝子<sup>ガラス</sup>の破片とともに落下しながら、レミリアはそう思つた。

ジョースター邸に来てからは、人に怪しまれないように最小限の食事しかしておらず、血が足りていないのである。先ほど負った首の傷も通常なら一瞬で治癒するが、治りが遅かつた。

「やれやれ、骨が折れるわ」

地上に叩きつけられる寸前にレミリアは背中の骨格と筋肉の構造を組み換え、通常の人間にはないある器官——蝙蝠のような黒い羽を作り出した。

巨大な羽が空気をとらえると、揚力を得た身体は舞い上がった。飛

翔する中、視界の隅で、ディオが割れた窓からこちらを見上げているのが見えた。

屋根に着地すると、どつと疲労感が押し寄せてきた。

(やつぱり、血が足りない……わね)

フルパワーが出させていたときならばいくらでも滞空時間は伸ばせるが、今の状態だと羽を出すだけでも目に見えて体力を喪う。早めにディオと決着をつけなくてはならない。

「……なるほどな、そんなこともできるのか」

声のした方を見ると、ディオも屋根の上に登つて来ていた。月に照らされ、逆光になっているために顔はよく見えないが、その双眸はレミリアをしつかりと見つめている。

「その辺りは流石、永い時を生きているだけある……だが、さつきよりも疲れているように見えるぞ」

「だからと言つて、ティー・ブレイクはさせてくれないんでしょう?」「どうかな。お前がその首を差し出してくれればその限りじやない」

ディオはそう言うと、心臓を狙つて鋭い貫手ぬきてを放つた。からうじて槍でガードしたもの、衝撃は骨まで伝わり、右腕がしびれた。続くディオの連撃を槍でさばき続けるが警官隊で生命エネルギーを補給したディオに比べパワー、スピードともにやはり分が悪く、次第に押されていく。

(このまま戦つても仕方がないわね。賭けに出たほうがいいかしら)

一瞬、レミリアは守りに使つていた槍を空中に泳がせ、隙を作つた。もちろんディオがそれを見逃すはずもなく、閃いた手刀がレミリアの腹部を深々と貫いた。

「かはっ！」

ぴぴつ、とレミリアの吐いた血がディオの頬に飛び散つた。

「フン、貧弱、貧弱ウ！　どうやら吸血鬼としての「格」はこのディオの方が上のようだな……さあ首を刎ねて終わりに……」

そこまで言つたとき、ディオは妙な顔をした。ディオは右手をレミリアから引き抜こうとしているのだが、レミリアが傷口周りの筋肉を

締めているため、それができないのである。

「抜けないッ！ 右手が！」

「……確かに今の身体能力は貴方が上。でも、殺し合いの経験なら――」

レミリアは無防備なデイオの顔面に照準を定め、大きく振りかぶつた。

「――私の方が上よ」

レミリアの突きはデイオの左眼窩から後頭部へと抜けた。

「K U A A A！」

レミリアが力を緩めると、デイオはたらを踏んで後ずさつた。

「吸血鬼の弱点はどこまで行つても頭。死なないにしても、大きく損傷すれば回復は遅いわ」

年季が違うのである。波紋使いや吸血鬼狩りといった強敵との闘いの経験で、レミリアは自分自身一吸血鬼の弱点については知悉していた。

引き抜いた槍はデイオの血にまみれ、ぬらぬらと輝いている。レミリアは血糊をちろりとなめ、渋い顔をした。

「不味い。やはり、下衆の血は私の口には合わないわ……」

レミリアが再び槍を振り上げたとき、デイオは激昂した。

「勝つた氣でいるなよッ！」

デイオが強く右足を叩きつけると、そこを中心に戸敷の屋根が沈んだ。直後、崩落した屋根は大量の瓦礫と化し、二階へと降り注いだ。たりと倒れた。

（彼はさつきまでは善良な警官だった……つらいが、やり遂げなくてはならない）

レミリアとデイオが屋根で戦っている間、ジョナサンは襲ってくる

ゾンビと闘っていた。死人といつても頭を失えば行動はできないようで、ジョナサンは相手が一気に襲つてこられないように細い廊下を後ずさりながら、一人ずつゾンビを斃していた。

屋敷にはジョナサンがつけた火が回りつつあり、ジョナサンのいるホールの階段周辺を除き、二階のほとんどは火の海となっていた。

「血だあ……あつたけゝ血イ飲ませろお……」

しかし、残つたゾンビは一体だけ。少なくともゾンビを倒すのに手間取つて焼け死ぬ心配はない。ジョナサンが武器を握りなおしたとき、上から轟音が聞こえてきた。

「なんだッ！」

とつさに飛びのくと、先ほどまでジョナサンがいた空間に瓦礫が降り注いだ。ゾンビは奇妙な音を立てて押しつぶされる。天井が落ちてきたのだ、と事態を認識したときにはすでに、ジョナサンの目には瓦礫の山が映つていた。そしてー

「レミリア！ 大丈夫か」

見るも痛々しいレミリアの姿がそこにあつた。ディオとの対決で受けたらしの無数の傷と、腹部を穿つ深い大穴。かろうじて立つてゐるもの、傷の治りはディオほど速くはないようだつた。

「あら、ジョナサン。ごめんなさい、ディオはまだ倒せてないの……」

レミリアは、階下を指さした。どうやらディオの方は吹き抜けから一階に転落したらし。ホールの真ん中で、顔の左半分にできたクレーターケ再生成せながら、こちらを見上げていた。

「もういい、僕が戦う。君がそれ以上やつたら死んでしまう」「無理よ。ここまで火事が広がれば、普通の人間なら戦うどころじゃないわ。貴方こそ逃げなさい」

ジョナサンは逡巡した。レミリアが自分の意見を曲げないのは知つてゐる。かと言つて今の彼女一人で戦つたら、まず命はないーそのとき、ふわりと甘い香りが鼻をついた。レミリアがジョナサンに抱擁したのである。次いで、首筋にちくりとした痛みが走つた。少し遅れてレミリアに噛まれたのだと気づいた。

「レミリア……何を」

ジョナサンはもがこうとするが、レミリアはしつかりとジョナサンの動きを封じており、ほどくことができない。なぜだ、とジョナサンが驚愕していいるうちに血を吸われていった。

「大丈夫。吸血鬼のエキスは入れてないし、命を奪うつもりはないわ。這いずつて動けるくらいは血を残してる」

レミリアはジョナサンのうなじから口を離してそう言うと、ジョナサンを抱え、窓から飛び降りた。レミリアは羽を出してゆっくりと落下すると、ジョナサンを地面に横たえた。

「ディオは私が責任をもつて片づけるわ。どうせその身体じゃ、今は戦えないでしよう？」

「でも、君だけに戦わせるわけにはいかない」

「……貴方のそういうところ、嫌いじゃないわ。だから、こうしたの」

「待て！ レミリア！ 待ってくれ！」

「私が死ぬわけじゃないんだから。大袈裟ね」

レミリアはそう苦笑すると、猛火に支配されつつある屋敷の中へと飛び込んでいった。

ディオが目に負った傷を完治させると同時に、レミリアが羽を広げて吹き抜けから一階へと舞い降りてきた。

「……自分を捨て駒にしてでも、ヤツを逃がそうということとか？」

「ジョナサンは私のお気に入りだから」

「フン、無駄なことを。お前を殺してジョジョも殺すことになる。それから、この事件にかかわった者全員もな」

ディオがそう言つたとき、レミリアは首をかしげた。

「一つ誤解があるわね。私は捨て駒になる気なんかさらさらないのでけれど」

「なんだ…」

と、と言おうとしたときにはすでに、レミリアが目の前にいた。とつさに頭を守ろうとしたそのとき、鉄槍がディオの胸を深々とえ

ぐつていた。

「死ぬのは、貴方一人」

(なんだこのスピードは……つきとはまるで違う)

ディオはいつたん距離を取ろうとしたが、レミリアはぴったりとついてくる。レミリアの薙ぎが右肩口から脇腹に抜け、ディオはのけぞつた。

「ジョースターの血は特別なのかしら？ 生命エネルギーが横溢して  
⋮久々に愉快な気分」

レミリアはそう言いながら、瞬く間に頭部を守るディオの両腕を孔だらけにする。が、炎で弱っていたのか、それともレミリアの振るう力に耐えられなかつたのか、最後の一突きで、槍が半ばから折れた。その反動で、レミリアは大きく態勢を崩した。

「今だ、食らえッ！」

ディオはレミリアの顔めがけて拳を繰り出した。かつてジョナサンの目をえぐつた必殺の技だが、レミリアは難なく手で受け止める。と、ディオの拳を握りつぶす。めきやめきや、という音とともに右手が砕け、折れた骨が飛び出ている肉の塊へと変じた。

「ぐう……ッ」

強い。認めざるを得ない。

レミリアがジョナサンの血を吸つたため身体能力は互角になつたが、レミリアは闘いの技術、経験においてディオの数段上を行つてい。警官たちのように人間を相手にするのであれば力の圧倒的な差で押し切れるが、力の拮抗する吸血鬼同士で戦えば、技量がものをいうことになるのだ。

「さて、と」

レミリアはちらりと上を見た。天井の崩落した部分にはぼつかりと穴が開き、炎を透かして見た月は血のような赤に染まつていた。レミリアはディオの方へ顔を戻すと、凄絶な微笑を浮かべた。

「こんなに月も紅いから……本気で殺すわよ」

情け容赦のない攻撃が始まつた。動体視力も大幅に上がつているらしく、ディオの拳はかすりこそすれ当たらず、レミリアの攻撃はこ

とぞとくがデイオの肉をえぐり、骨を折り、内臓を破裂させる。

これはさすがに勝てない。相手の攻撃のスピードに回復が追いついておらず、しかも炎が回つて脱出不可能になりつつあるのだ。羽を出せないデイオはこのまま闘いが進めば生き残れる見込みはない。

「こうなれば、お前も道連れにしてやる」

デイオは態勢を低くすると、レミリアに体当たりした。不意を突かれたレミリアはまともにタックルを食らい、引きずられる。

「無駄なあがきね」

レミリアの手刀がデイオの肩に入り、肩甲骨のひしやげる音がした。しかしそれでもデイオは勢いを緩めず、そのまま柱にレミリアを叩きつけた。デイオは柱でレミリアを挟み、動けないようにぎりぎりと締めつけた。

「どうだ。動いてみろ」

「……これで動きを封じたつもり? この程度ならー」

レミリアがその続きを言おうとしたが、それは建物の崩れる音にかけ消された。焰に苛まれた屋敷が、ついに耐えきれなくなつたのである。二人の頭上に、途轍もない質量をもつた瓦礫が降り注いだ。

時間切れであった。

ジョースター邸全体が猛火にまかれ、みるみるうちに崩壊していく。焼け落ちる屋敷の中で、二人の吸血鬼は運命を共にしたのである。

スピードワゴンも、ジョースター卿も、ワンチエンも、メイリンも、遠くから瀟洒な屋敷だつたものの残骸が火の粉をあげて燃え盛り、煌々と周囲を照らしているのを見ていた。

ジョナサンは這いずつて屋敷から離れていく途中でそれを見ていた。血を多く抜かれたせいか妙に眠く、はつきりしない意識の中でもんやりと考えていた。

結局、レミリアはあの屋敷に入つてから出てくることはなかつた。デイオは倒せたのだろうか。そして、彼女は生きているのだろうか。ジョナサンは答えの出るはずのない問いを続けながら、ついに意識を手放した。

炎が収まった二日後、屋敷をあさつてみようと提案したのはワンチエンだった。

「あそこは貴族の屋敷だし、何かいいものあるかもしれないね。メイリンは来る？」

「いいですねえ。お金はあるに越したことはありませんし」

美鈴とワンチエンはさつそくジヨースター邸へと向かつた。ディオの逮捕の際に立ち寄ったときの屋敷とは思えないほどの荒廃ぶりで、無事な部分もあるが、ほとんどは瓦礫の山と化していた。

「私あつちの方探すからメイリンはこつち探してね。宝石とかあつたら山分けよ。ウヒヒ」

「了解です！」

美鈴はさつそく瓦礫をひっくり返し、お宝を探し始めた。ワンチエンの手伝いでお金をもらつてはいるが、多くはないのである。そのため小金を稼ぐチャンスがあれば墓泥棒だらうと殺人だらうとなんでもやつっていたので、火事場泥棒をするとなつても別段心が痛むということはなかつた。

（でも、ちよつと嫌あな気を感じる……気がするなあ）

美鈴は周りを見回しながらそう思つた。あの日に感じたのと同じ種類。瘴気が消えず、いまだに残つているのだろうか？ それとも邪悪な怪物がこの周辺にいるのだろうか？

少し考えてから、美鈴は瓦礫を掘り起こす作業に戻つた。どちらにせよ、人に見られると面倒だし長居はしないほうがいい。そことこの価値のものを見つけたら退散することにしよう。

そう思つたとき、何かが埋まつているのが見えた。

「……腕？」

華奢で青白い、人間の腕。美鈴は急いで瓦礫を除き、埋まつていた

「彼女」を掘り出した。

まるで人形のように端正な顔をした青髪の少女だつた。ところどころ火傷を負つているものの真っ白な肌をしており、衣服も原型をどめていないが、もとは上等の布でできたネグリジエだつたようで、身分の高い者であることは分かつた。

呼吸はしている。生きている。美鈴はそれを確認すると、素早く頭を巡らせた。

おそらく彼女はジョースター家の関係者で、屋敷から逃げ遅れたのだろう。彼女を介抱してジョースター卿のもとに送り届けてやれば、かなりの謝礼を受け取ることができるのではないか。

「ワンチエンさん、来てください！　いいの見つけちゃいましたあ！」

しかし、返事は帰つてこなかつた。少し待つても来なかつたため屋敷跡を回つてみたが、ワンチエンはどこにもいなかつた。

「もう、どこに行つたんですか。まさか山分けと言つておいて自分だけ何か見つけて帰つたんじゃないでしょうね……」

美鈴はぶつぶつ言いながら彼女一レミリアを抱えた。とにかく彼女を世話してやれば大金が転がり込んでくるはずだ。連れ帰らない手はない。

レミリアを抱いで、美鈴は鼻歌まじりに食屍鬼街への帰路についた。

## ホワイトチャペルでつかまえて

火事はジョースター邸のほとんどを焼き尽くしたが、幸い財のほとんどは銀行にあつたので、ジョースター親子二人が暮らしていく分には十分すぎるほどの金が残っていた。

警察には逮捕の際の事故だと説明したが、ジョースター卿には実際に何が起きたか、つまりデイオとレミリアが吸血鬼であつたということを伝えた。ジョースター卿は半信半疑といった表情だったが、ジョナサンが首からかなりの量の血を抜かれていたことを知り、ひとまずは納得してくれた。

「……レミリア」

ジョナサンは屋敷の跡を眺めながら、つぶやいた。ついに彼女は戻つてこなかつた。炎の舞い散る屋敷へ行つて、それつきりだつた。しかし瓦礫を掘り起こしても、レミリアの死体はどこにもなかつた。彼女の生きた痕跡は、この世にはもう無いのかも知れない。

——紳士なら約束を守りなさいね。

(僕は生き残つた。：でも、君がいなくても約束は守れないじやないか)

ジョナサンは、力が要る、と思つた。誰かの命を守るため、後悔しないため、己の無力を呪わずに済むために。

「ちよいと君、いいかい」

振り向くと、奇妙なもじやもじや頭にシルクハットを被つた男が立つていた。

「私の名前はウイル・A・ツエペリという。ジョースター卿が持つているという石仮面の噂を聞いてはるばるイギリスまで来たのだが……これは一体何が起きたんだ？」

「石仮面？」

「一種の魔物を生み出す道具だ。ひよつとして君は、こここの関係者かね？」

魔物、と聞き、怪物と化したディオのことを思い出した。ディオがジョナサンの部屋に入つてから何が起きたのか不思議でならなかつたが、あの変貌をもたらしたのは、ジョナサンの研究していた石仮面によるものだつたのだろうか。

「……僕の名前はジョナサン・ジョースター。貴方が会いに来たのは父さんですね。……ところで、貴方は魔物といいましたが、それについて詳しく教えてくれませんか？　僕はあの日の夜に起こつたことをもつと知りたいんです」

ジョナサンの必死な顔を見て、ツエペリはつぶやいた。

「なるほど、これは少し君に教えた方がいいかもしないな……。石仮面の秘密と、それが生み出した怪物が、まだ生きているということを」

「なんだつて？」

ジョナサンは驚愕した。ディオが、まだ生きているというのか。「そうだ。二人の東洋人がジョースター邸に行つて行方不明になつてゐる。まだ、事件は終わつていない：そして私の話を聞けば、君の運命は変わるだろう」

『BURNED！ TRAGEDY IN JOHSTER, SM  
ANSION！（炎上！ジョスター邸での悲劇）』  
『JACK THE RIPPER DID AGAIN！（ジャック・ザ・リッパーまたあらわる！）』

レミリアが意識を取り戻して目を開けると、新聞の見出しが視界いっぱいに映つていた。あの事件から三日後の日付が書いてある。がさがさと新聞をめくる音がしたかと思うと、その向こうから、ふわあ、と大きなあくびが聞こえてきた。誰かが横たわつてゐる彼女の前で新聞を読んでいるのだ。

部屋は窓が閉め切られ、ほの暗さが隅にわだかまつっていた。自身の寝ている粗末なベッドの他には様々な薬草や瓶、何に使うのかわからぬガラクタが転がっている。おそらく、目の前で小さい椅子に座つて新聞を読んでいる人物の部屋なのだろう。

(……確か私がディオと鬭つているときに屋敷が崩れて……)

瓦礫の下敷きになつたのだ。しかも猛火に焼かれ、その傷を治癒させるのに力を使い果たしたので、ジョナサンの血で得たパワーはもうすっかりなくなつてしまつていた。

あと少しでディオに止めをさせたのに、と歯噛みしたとき、レミリアの前にいた人物は新聞紙を閉じ、ガラクタの山に放り投げた。「彼女」はレミリアが目覚めていることに気がつくと、片膝をつき、うやうやく一礼した。

「お目覚めですか。レミリア様」

「……誰よ、貴方」

「私、東洋の薬師の弟子をしております、紅美鈴と申します。ジョースター邸が燃えた日、そこに居合わせていた者です」

おそらくジョナサンがディオの毒薬の正体を突き止めるときに証人として呼ばれていたのだろう。しかし彼女はなぜレミリアを助け出したのだろうか。彼女はレミリアの存在すら知らないはずなのに。

それを聞くと、美鈴は眼を泳がせながら答えた。

「あー、ジョースターさんと同行する際にあなたの話を聞いていたので…助けに」

「わざわざあの焼けた屋敷に来たの？ 私が焼け死んでるとは思わず？」

「まあ理由はどうでもいいじゃないですか。結果としては命が助かってるんだから、細かいことは気になさらなくとも」

「……まあそうね。ありがとう」

美鈴が何かを隠しているように見えたが、レミリアは深く追求しないことにした。とにかく今はジョナサンに会うことができればそれでいい。

(彼らが私を留め置いてくれるかはわからぬけど……ね)

人間のふりをしているときは優しかった人間が、吸血鬼であると知つた途端に豹変するのをレミリアは嫌というほど経験していた。だから正体が知られた場合は何者にも完全に気を許すつもりはなく、お気に入りのジョナサンもそれは例外ではなかつた。

もし次にジョナサンと会つたとき、彼がレミリアを受け入れてくれなければ、また別の土地へ向かうことにしよう。そう思つていると、がちやり、と扉の開く音が聞こえ、何者が入つてくる気配がした。

「美鈴、帰つてきてたか」

美鈴がはつとして振り向くと、そこにはワンチエンが立つていた。皮膚はしなび、真つ青で血の氣の通つていな顔はまるで死人のようだつた。

「ワンチエンさんですか。いつたい一日もどこ行つてたんです?」「素晴らしい人に会つたよ。私、その人に頼まれて探し物してるね。……そこに寝てるのは誰?」

「ジョースター邸のレミリアお嬢様です。……ところで探し物つてなんですか?」

「……ディオ様に捧げる、活きのいい人間ね!」

その瞬間、ワンチエンは隠していた長いかぎ爪を振りかざし、美鈴に飛びかかった。

「……なるほど、よくわかりました」

美鈴は軽やかに白刃を躲してワンチエンの懷に入ると、腹に掌底を食らわせた。まともにカウンターを受けたワンチエンの小柄な体躯がくるくると舞い、壁に叩きつけられる。

「おげえええッ! 热い! 热いい!」

ワンチエンの腹から煙のようなものが出ていた。単に力で殴つたのではない。あの傷は。

「波紋傷……」

レミリアがつぶやくと、美鈴は眼を丸くした。

「波紋……お嬢様の国ではそう言うのですか? 私の生まれた国では仙道、そこから生み出されるエネルギーを『氣』と呼んでいます」得体のしれない攻撃に恐怖を感じたのか、ワンチエンはくるりと踵

を返すと一目散に逃げだした。美鈴は追いかけようとはせず、ワンチエンが闇の中に消えるとレミリアに向き直った。

「貴方……波紋使いだったのね」

波紋使いは、吸血鬼と敵対する人間の中でも特に厄介な存在である。波紋エネルギーをまとった攻撃でできた傷は再生が遅く、頭に打撃を受けようものなら命にかかる。吸血鬼にとつては猛毒をもつた蛇のようなものである。

「ええ。ちなみに、お嬢様が吸血鬼であることも知っています。カーテンを開けようとしたらお嬢様の手が蒸発しそうになつて驚きました」

平然と答える美鈴に、レミリアは疑問を投げかけた。

「……なぜ私を殺さなかつたの？」

弱つて昏倒しているレミリアなら、いくらでも殺すチャンスはあつたはずなのに。そう思つていると、美鈴は不思議そうに聞き返した。「私がお嬢様を殺す理由があります？……はは、なにも波紋使い全員が吸血鬼狩りをやつてるわけではないんですよ。私は、お嬢様やワニチエンさんが誰を殺そつが、どうでもいいんです。コレさえあれば」

美鈴はウインクして、親指と人差し指で丸を作つた。なるほど、彼女はレミリアの存在が金になると思つてゐるのだろう。ようやく合点がいつた。

「じゃあお嬢様も目覚めたことですし、そろそろ、ジョースター卿に連絡をしますか」

「……それは待ちなさい」

ディオ、とあの東洋人ゾンビは言つていた。レミリアと同じく奴もまだ生きているのだ。レミリアとしてはディオを始末しておかなければ不愉快であるし、ディオの方もレミリアが生きていると知つていれば、実質的な得がなくとも殺しにくるだろう。

（それなら……ジョースター邸へ行く前に生命エネルギーを補給してディオを消しに行つた方がいいわね）

レミリアは美鈴を見上げて命令した。

「美鈴……貴方の望みはお金よね？　それを叶えてあげるから、私を人の多い街に連れて行つて」

「おいお嬢ちゃん、そろそろお家に戻らなくともいいのかい？」

ホワイトチャペル街の、薄暗い裏路地。二十一時を告げる鐘が鳴つた時、立派な髪を生やした男はそう言つた。すると、隣にいた小貴婦人——レミリアはつまらなそうな顔をした。

「冗談でしょ？　もつとどこかで遊ばないの？」

「ふふん、君みたいな子は、家で親が待つてるだろ。夜にどこに遊びに行くつていうんだ？」

「…ど…へでも。小父さんの家に行くのはどう？」

男は笑いながら片眉を上げた。

「そんなことしてたら君、いつか狼に食われちゃうぞ。それに、切り裂きジャックに会うかもしれない」

「切り裂きジャック？」

「女性ばかり狙う殺人鬼だよ。会つたが最後、君も手術用のメスでそのかわいい顔を切りきざまれるだろうね」

脅かしてみせる男に、レミリアは首をかしげた。

「貴方に守つてもらうから怖くないわ。それに…」

「それに、なんだい？　俺がそれだつたらどうするんだい？」

いつの間にか、男の右手にはメスが握られていた。そして、本性をあらわにした男——ジャック・ザ・リッパーは、間髪入れず襲いかつてきた。

「この夜遅くまで遊んでる、堕落した女がアーツ！」

むんづとレミリアの髪を掴もうとした瞬間、ジャックの両腕の動きが止まつた。レミリアの手がジャックの手首をつかみ、動きを掣肘していたのである。

「何い？」

ジャックの不運は、よりもよつて、獲物を求めている吸血鬼を

ターゲットにしたことだった。当然吸血鬼の力にかなうはずがなく、キスをするような距離までレミリアが顔を近づけても振りほどくことはできなかつた。

「狩る者は往々にして狩られることに気がつかない……」

耳元でそうつぶやくと、レミリアはジャックの首筋に噛みつき一気に血液を吸い上げた。ジャックは身体を動かせないまま、レミリアの口腔へと生命が流れ出していくのを甘受するほかなかつた。

そして最後の一滴まで飲み干すと、レミリアは口を離した。支えを失つたジャックはばつたりと倒れ、そのまま動かなくなつた。失血死したのである。

「終わりましたか？」

ふわあ、とあくびをしながら物陰から現れたのは美鈴だつた。レミリアは振り返つてうなずいた。口から溢れた血が、レミリアの胸を赤く染めていた。

「これで何人目かしら」

「ええつと、これで7人目でしたかね」

「そう。じゃあ今日はこれくらいかしらね。……起きなさい」

ぱちん、とレミリアが指を鳴らすと、ジャックの死体がむくりと起き上がる。レミリアが吸血の際にエキスを入れていたので屍生人と化していたのである。美鈴はそれを見て、渋い顔をした。

「うええ、他の人はある程度血を吸つたら逃がしてたのに、今回はゾンビにしたんですか？」

「私だつてこんなもの作りたくないわ。でも思いつきり魂が薄汚れて下僕としては扱いやすそうだったから、デイオを消すまでは使つてみようかなつて思つたの。人手がいるかもしれないし」

「まあ私に近づけなかつたら別にいいですけど……ところでそろそろ約束のお金をくださいよ」

この一週間、レミリアはロンドンの裏街で人狩りをしていた。ジョースター邸にいたときは派手に動く必要がなかつたうえにリスクが高かつたので吸血行為を慎んでいたが、今はそのどちらも当てはまらない。デイオを倒さなくてはならないからだ。

「しょうがないわね、ほら」

「なんですかこれ……株？」

レミリアが美鈴に手渡した紙には、いくつかの銘柄が書いてあつた。

「3日以内に大幅に上がるはずよ。とりあえず、それが私を助け出してここまで連れてきてくれた分の報酬。もつと欲しいなら、私の正式な従者になつてもらうけどね」

美鈴はいぶかしげにレミリアを見た。

「これは確実に上がるんですか？」

「貿易で稼いでいるジョースター卿の屋敷にいた者の言うことが信用できないかしら？ イギリスの貿易会社の内部情報をもとにそのリストを書いたんだけど」

「なるほど。それはありがたいですね」

美鈴はころつと態度を変えると、大事そうに紙切れをポケットにしまつた。レミリアは上がりそうな株を占つただけであるが、ほとんど外れたことはないので問題はないだろう。嘘をついたのは説得力を伴わせるためである。

「……で、次の仕事は何ですか？」

「私についていくつもり？」

「お嬢様についていけば少なくともお金には困らなうなので」

「危険かもしれないわよ」

「まあその危険に見合う分報酬をいただければ」

正直な答えに、レミリアは苦笑した。しかし昼間に動けるものを従者にしておくのは悪くない。ディオと闘うときに波紋使いが仲間にいれば闘いを有利に進められるからだ。

「わかつたわ。じゃあ契約成立ね。よろしく」

「こちらこそ」

レミリアが差し伸べた手を、美鈴は固く握った。

「裏の世界に手え回したら、例の二人が見つかりやした」

がたごとと揺れる馬車の中で、スピードワゴンはそう言つた。同乗者はジョナサンとツエペリ。スピードワゴンがディオの捜索に奔走している間、ジョナサンはツエペリに波紋法という特殊な技術を教わつていたらしい。心なしかジョナサンは以前よりも生命力に満ち溢れ、強くなつていて見えた。

「ただ、見つかった場所が問題で……ワンチエンの方は風の騎士たちの町、紅美鈴の方はホワイトチャペルの街。ジョースターさんたちを襲つたゾンビはワンチエンだつて聞いたからウインドナイトロットに行くのが筋だろう。でも、ここで気になる噂を小耳に挟んじまつたんだ」

「ほう、スピードワゴン君、気になる噂つてのは？」

「ホワイトチャペルの町に、吸血鬼が出るつて話なんだ。そいつに血を吸われた奴は、姿について喋るのを禁じられてから解放されるらしい」

ツエペリは眼を丸くした。

「吸血鬼が獲物を殺さずに解放するなんて珍しいな。誰かがその姿を語つてくれたかね？」

「いいや。いくら脅しても血を抜かれて殺されるよりはマシだつて言つて教えてはくれなかつたそうだ」

「iform、しかし迷うな。ウインドナイトロットか、ホワイトチャペルか」

ジョナサンは少し考えてから訊いた。

「スピードワゴン、ここから近いのはどつちだ？」

「へえ、ホワイトチャペルになりやす」

「じゃあ、そつちへ行こう。正直、ディオが獲物に情けをかけるとは思えないが……念には念を入れたほうがいいかもしれない」

馬車は進路をホワイトチャペルに向けて進み、そして日が沈みかかる頃、ホワイトチャペルに到着した。煉瓦造りの建物が並び立ち、地面は石畳でしつかりと舗装された、綺麗な街だつた。

「そういうばこの街には吸血鬼だけじゃなくて殺人鬼がいるらしい。

嫌な街だぜ」

馬車から降りてスピードワゴンがつぶやくと、ツエペリはグラスにワインを注ぎながら笑った。

「ははっ、吸血鬼を倒しにいくわしらがそんな殺人鬼程度を恐れてたら世話ないわい！」

太陽が山並みの向こうに沈むと、あたりはすっかり暗くなつた。人の気配もなく、寂しい街灯がぼんやりと光つているのが見えた。

「氣をつける、ジョジョ。今は「やつら」の時間だ。もしここにディオがいるなら、どこから襲い掛かつてくるかわからん」

「ええ……」

ジョナサンが何かを答えようとしたとき、十メートルほど向こうに、街灯に照らされた一人の男が馬車のそばに立つていてことに気がついた。普通の人間が見れば、主人が家から出てくるのを待つていてる御者だと思うだろう。しかし血走った目に、しなびた肌、そして、特有のよどんだ気配は、間違いなくゾンビのそれであった。

「…敵だ」

ジョナサンとツエペリが身構えると、その男も敵の出現に気づいたらしくうなり声を上げたが、襲い掛かつてくる気配はなかつた。ただ、馬車を守るようにじりじりと牽制するような殺氣を飛ばしてくるのみである。

「……どうしますか。ツエペリさん。先手を取つて攻撃しますか？」

「待て、ジョジョ。奴さん、どうも馬車の中身が大切らしい。ひよつとすると、大当たりを引き当てるかもしね」

あの馬車の中にディオがいるのだろうか。スピードワゴンは生唾を飲み込んだ。あの日の夜の惨劇を思い出し、身が震えた。

「……ジャック、どうしたの？」

馬車の中から声が聞こえてきた。凜とした少女の声。予想外の出来事に、スピードワゴンの頭は混乱した。が、それ以上にジョナサンの方が衝撃を受けているようだつた。その声を聞いた途端に目を見開き、開いた口から声をもらした。

「……死んだはずじゃ」

かたん、と扉の開く音がした。中から現れたのは、赤いドレスを身にまとつた少女だつた。少女はジャックと呼ばれたゾンビを一瞥してからスピードワゴンたちに目を向けると、なぜか微笑みを浮かべた。そして、ドレスの裾を持ち上げ丁寧にお辞儀をした。

「あら素敵な方々。初めまして、私はレミリア・スカーレットという者……。そして久しぶり、ジョナサン」

## 馬車の音、夜の騎士

懐かしい声。あの日、ふいと陽炎のようにいなくなつて、二度と会うことはないだろうと思っていた彼女——レミリアが馬車から降りて挨拶したとき、ジョナサンの心には言い表しきれないほどの多くの感情が押し寄せてきた。驚き。疑問。喜び。最も割合が大きかつたのは、安堵だった。

「よかつた……君もあの屋敷から生き延びていたのか」

「ええ。私も貴方の顔が見られて嬉しいわ」

ふわりと笑つた彼女は、あのディオと死闘を繰り広げていたとは思えない、無邪気な少女に見えた。しかしジョナサンが無意識に一步を踏み出したとき、ツエペリが彼の肩をつかんで引きとめた。

「待て、ジョジョ。彼女が：お前の言つていた、ディオと闘つっていた吸血鬼か？」

「ええ。でも彼女は人を殺してはいない。血を吸われた者も逃がしてゐるじゃありませんか」

「じゃあ、なぜゾンビのお供が彼女のそばにいるんだね？」

そう言われて、はつとした。ディオは警官たちを殺して、ゾンビを作つていたのだ。血を吸われて抜け殻となつた者に吸血鬼のエキスを入れて。つまり、レミリアのそばにいるゾンビは、彼女に吸血され、殺された人間の成れの果てに違ひないのである。

「吸血鬼に心を許しちゃいけない。石仮面をかぶつたら、肉親にさえ平氣で襲いかかる。今まででは目立たないために殺さなかつたのだと思うが」

「レミリア。君は……その人を殺したのか？」

そう訊くと、レミリアはあつけらかんと答えた。

「ええ。血を吸いつくした後、下僕にしたわ」

「なぜ殺したんだ？　君は僕を助けてくれたのに」

「少なくとも私はこいつを殺してもいい人間だと思ったから。貴方は

気に入っていたから。シンプルでしょう？」

途端に、ジョナサンはレミリアとの距離が急に離れてしまったように感じた。ジョナサンの見てきた彼女の優しさの裏には、悪魔の顔があつたのだ。心臓に杭を打ち込まれたような気分だった。

「君は……君は取り返しのつかないことをしたんだ。デイオとやっていることは同じだ」

「そんなことは知っているわ。人の命を貰わなくてはならない身となつた私にはもう取り返しがつかないの。400年も前からね」ジョナサンが目をみはると、レミリアは何かを思い出したようにぽんと手を打つた。

「そりいえば、私が石仮面をかぶつた経緯を教えてあげる約束だつたわね。……まあ、くだらない話よ。貴方の曾祖父が生まれるよりもずっと前が、私の生きていた時代だつた。

そして私が妹と遊んでいるときに仮面の力を誤つて使つてしまつて。一緒に暮らしてた貴方ならわかると思うけど、まともな生活は送れなくなつたわね。それなのに時間だけはあるから、人間たちに石を投げられないようになちこちを旅してた。ずっとこの調子。ふふ、面白いでしよう？」

自嘲気味に答えたレミリアを、ジョナサンは責めることができなかつた。彼女の言葉の裏には、人間でなくなつたことへの無限の後悔と悲嘆が隠れているように見えたのである。

立ち尽くすジョナサンの前に、ツエペリが進み出た。

「お嬢さん。確かにあんたは望んで吸血鬼になつたわけではないようだが、人が死んでいる以上、無視することはできん」

「おお、と波紋を練るときに発せられる、独特な呼吸音がツエペリの喉から聞こえてきた。完全に闘る気だ。しかし一方、レミリアはツエペリが迫つても全く防御する気配を見せず、くるりと後ろを向き、馬車に入ろうとする。

（……どうか、彼女はツエペリさんの力を知らないんだ！）

ただの蹴りならレミリアにダメージはないだろう。しかし波紋による蹴りは、彼女の回復力をもつしても、致命傷になりうる。

「仙道波蹴ーッ！」

一陣の風が吹いた。

避ける、という間もなく、ツエペリの蹴りがレミリアの後頭部に炸裂した——かに見えた。が、高く振り上げられたその足は、割り込んできた第三者の腕によつて受け止められていた。

「お嬢様。なんでご自分で何とかしないんですか？」

「貴方が来るのがなんとなく分かつっていたから」

紅美鈴。あの日、ジョースター邸にいた中国人二人組のうち一人だつた。そして、蹴りを受け止めた美鈴の腕がまばゆい光を発したかと思うと、ツエペリは吹き飛ばされた。

「これは……まさか、あんさんも波紋使いか」

ツエペリは危なげなく着地すると、美鈴を見据えた。どうやら、反発する波紋によつて磁石のN極とN極、S極とS極のように、ツエペリを跳ね除けたらしい。美鈴はそれには答えず、黙つて中国の拳法らしき構えを取つている。

「ツエペリさん、波紋を練つて平氣つてことは、彼女は」

「ああ……おそらく紅美鈴は波紋使いであり、人間だ」

彼女がゾンビであれば波紋の呼吸をした瞬間に内部から体が崩れて死ぬはずである。そうならないということは、美鈴は彼女の意思で吸血鬼であるレミリアに従つているということになるのだ。

「なんで吸血鬼をかばうんだ！ テメーッ！」

スピードワゴンの問いに、美鈴は苦笑しながら答えた。

「裏町をしきる貴方ならわかると思うんですがね。食いつぱぐれないためですよ」

そう言うと美鈴は地面を蹴つて後方へと跳躍し、馬車の上へ着地した。そのときにはすでにレミリアは馬車の中に入つており、ジャックも御者台に乗り鞭を持つていた。

「必ず占いが当たるかはわからないけど……ジャック、目的地はウインドナイツロットよ。デイオもきつとそこにある」

乾いた鞭の音がした。馬のいななきとともに馬車が動き始める。どうやら馬もゾンビになつてゐるらしく、全身から血をにじませながら

ら力強く蹄を鳴らす。

レミリアは馬車の窓から赤い目を光らせ、射すくめるような視線をこちらに送っていた。

「Mr. ツエペリ、スピードワゴン。私、あなたたちには甘くないわよ。あくまでも私を殺す気なら、それ相応の対応をさせていただくな」

死せる者に御された馬車は瞬く間にその姿を消し、砂塵を残していった。ツエペリはそれを見送るや否や、馬車の方へと駆け始めた。「……追いかけるぞ、ジョジョ。馬のスピードは違うが、目的地は同じだ」

「たぶん、目的も同じだと思います。どうやつて居場所を突き止めたのかは知りませんが、彼女はデイオを倒すつもりです」

「そうだな。……吸血鬼同士で闘つてくれるとは、ラッキーなことだ。わしらは残つた方とやればよいというわけだからな」

その答えを聞いて、ジョナサンは黙つた。ツエペリはレミリアを倒すべき敵だと認識しているらしい。しかし、彼女の悪魔のような一面を見てもなお、本当にレミリアは倒すべき相手なのか、と思つてしまうのである。

ジョナサンとのおしゃべりで屈託なく笑つていた彼女の姿を思い出した。どちらが彼女の本性なのだろう。あるいは、両方――

「ジョースターさん、早く乗つて下せえ！　出発します」

思考の沼に沈みかけたジョナサンは、スピードワゴンの言葉によつて現実世界へと引き戻された。

「ああ、今行く」

（……いや、今はやるべきことをやるだけだ。ウインドナイツロット……そこで、ディオとレミリアを探すことを考えるべきだ）

最後にジョナサンが乗り込むと、レミリアの残した轍をなぞるように、馬車は走り出した。

食物連鎖。人間は本来その頂点に座している。人間自身が不遜にも万物の靈長を自称するのも、その自信から来るものなのだろう。しかし、頂点のさらに上に、「例外」——ディオという吸血鬼がいることは、人類のほとんどが知らない。

暗がりの中、女が横たわっていた。顔は真っ青で目は一切瞬かない。すでに命は絶えていた。

その傍らにたたずむ男——ディオは生命を吸いつくした抜け殻から目を離し、唇の端についていた血を拭つた。

「やはり、生命を吸えば吸うほど力がみなぎる……あの時よりもはるかにな」

ディオは、屋敷での戦いのことを思い出した。激しい炎と、レミリアとの熾烈な闘い。あれで生き残ったのは幸運というべきか。生き埋めになつた後に欲深なワンチエンが来なかつたら、何かのはずみで太陽に当たつていたら、間違なく死んでいた。

とはいっても、幸運だったのはディオだけではなかつたらしく、レミリアの方も生き残つていた。ワンチエンに美鈴という女を捕獲させに行つたとき、その家にいたという。おそらくディオと同じように美鈴に助けられたのだろう。

ちなみにジョナサンの方にもワンチエンをけしかけて撃退されているので、一人ともディオが生きていることを知つてしまつた。もともと石仮面の正体を知つたジョナサンとレミリアは生かしておくつもりはなかつたが、ますます彼らを消す必要がでてきたのである。「傷を癒したら……このディオが直々に惨殺処刑してやろう」

そうつぶやいたとき、扉を開けて女が入つてきた。寝起きなのか、ナイトガウンを羽織つて紫水晶のような瞳をこすりながらディオの足元にころがる死体を見た。

「……ディオ、また殺したの？」

「ノーレッジか」

彼女はこの屋敷の先住者にして唯一の生者だつた。ひどい喘息もちで、ロンドンの工場の煙に悩まされてこの田舎町に移り住んできたのだという。

「デイオがなぜ、Knowledge—ふざけた名だ、おそらく偽名だろー」と名乗る女を殺していないのか。1つは、火炎を自在に操る奇術を使うので闘うのが面倒だからである。彼女の生命エネルギーは闘いで受けるダメージに釣り合わないだろうし、他から獲物をさらつて来る方がはるかに効率がいい。

そして2つ目は、彼女がゾンビにならずともデイオに協力的だからである。研究材料を目の前にぶら下げていればおおむね従順で、しかも彼女のゾンビ研究はそれなりに役に立つ。

「もう、殺すなら言つてくれないと。ゾンビ研究のサンプルがもつと欲しいの」

どうもデイオの行為の善悪にはたいして興味がないらしく、デイオの作り出すゾンビについて調べることに夢中らしい。ゾンビ・吸血鬼の生態についての本を作るなどと息巻いており、最近は雪崩が起きそうなほど本を詰め込んだ書斎と実験を行つている地下室以外では彼女を見かけない。

「どうせ今晚にでもこの街はゾンビしかうろつかなくなる。問題はないだろう」

「うーん、それも困るのよ……ゾンビの内臓を人間に移植した場合にどうなるのかとかもテストしたいし…」

「勝手にやれ。人間の生け捕りくらいお前ならできるだろ」

そう言うと、ノーレッジは「それもそうね」とつぶやき、くるりと踵を返した。しかし、部屋を出ようとすると寸前にびたりと止まり、振り向いた。

「あ、そうだ。言おうと思つて忘れてたわ。トンネルで車の行き来を見張つてる奴からゾンビ鴉のメッセージが届いてたわよ。この街に向かつて来る馬車があるって。メンバーは、『御者』と、『赤髪の東洋人』と『青髪の少女』彼らも獲物にする？」

赤髪の東洋人は、おそらくワンチエンが殺し損ねたという紅美鈴だろう。そうなると、一緒にいる青髪は—

デイオは薄く笑つた。レミリアだ。こちらの居場所を突き止めてこの街に乗り込んできたのだ。おそらく並みのゾンビではかなわな

いので、ディオ自らが出るしかない——

(いや、もう少し万全を期すか)

力に任せて闘つていた以前と違い、ディオはレミリアを破るべく「氣化冷凍法」という技を編み出してはいた。しかし、相手も何らかの奥の手を隠し持つている可能性がある以上、うかつに動くのは得策ではない。ノーレッジとゾンビをぶつけてみるか。

「ノーレッジ。お前に任せた。その3人を殺つてこい。死体はどう使つても構わん」

「……仕方ないわね。タルカスとブラフォードは使つてもいい?」

「ああ」

ディオがそう言うと、ノーレッジは心なしかうきうきとした足取りで階段を降りて行つた。確かにタルカスとブラフォードは昔の死体をゾンビ化する研究でもつともうまくいった騎士だつたか。その強さを試してみようというのだろう。

(まずはお手並み拝見、というところか)

濃密な闇を切り裂くように、駆けゆく馬車があつた。乗つているのは波紋使い、ゾンビ、吸血鬼。ゾンビと化した馬は疲れを知らず、ホワイトチャペルから目的地までの距離を休みなしで走破せんとしていた。

「……まあ、これだけ時間があれば十分でしょう」

懐中時計は、23時を指していた。夜明けになればゾンビ馬を走らせるわけにはいかない。早めにつくに越したことはなかつた。

「あとはディオがこの街のどこにいるか……ゾンビをたくさん作つていたらわかりやすくていいのだけれど」「そうですね。ま、今夜中に見つけられそうになかつたら日光をしげそくなところを探しましょう」

美鈴は膝に乗せた袋入りクツキーを一口齧つて、ティーカップに口をつけた。レミリアが飲む紅茶とは違う緑の液体が注がれており、馬

車の揺れにあわせて波を作つてゐる。ちなみにこの茶を一度飲ませてもらつたことがあつたが、苦くて飲めたものではなかつた。

レミリアが胸の悪くなるような緑茶の苦みを思い出して渋い顔をしていて、美鈴は手持無沙汰だつたのか、そういえば、と言つてしまやべりを始めた。

「知つてました？　この前教えてもらつたんですが、ジャックつて娘がいるらしいですよ」

「ふうん、あの殺人鬼に？　貴女、ジャックには近づかないつて言つたのによく知つてるわね」

「お嬢様が血を吸つてる間、暇だつたので聞いたんです。母親はもう死んでて、娘と二人暮らしだつたそうで。ビックリですよね」

殺人鬼も人間としての生活はあるわけなので、家庭があつてもおかしくはない。

「それで何が言いたいの？」

「いえ、その子はどうなるのかなつて……」

ジャックがゾンビと化して表向き失踪している今、その娘は養つてくれる親がいないわけだから、孤児院に行くか娼婦になるかのどちらかを選ぶことになるだろう。その程度のことは美鈴でもわかるはずである。

「私への嫌味？……ま、ジャックを殺したことは微塵も後悔していないけど、確かにその子は氣の毒ね。信用できそうな娘なら召使いにしてあげようかしら——」

そのとき、すさまじい衝撃が馬車を襲つた。美鈴がとつさにドアを蹴破つて転がり出て、レミリアも後に続く。

外に出てみると、馬車は巨大な岩の直撃を受けてひしゃげ、数メートル後方に横転していた。ゾンビ馬はわめきながら前に進もうとしているが、背骨を打ち碎かれたのか起きることもままならず、足をむなしく空中を蹴つている。

「あら、これで死ななかつたのは予想外。だいぶ正確に命中したと思つたけど」

その声が聞こえた方を見ると、ダウナーな雰囲気の女が立つてい

た。紫がかつた髪はぼさぼさで、目には大きなクマがある。

（ゾンビではないけど、ゾンビみたいな奴ね）

そして女の両脇には、中世の騎士のような恰好をしたゾンビが二人控えていた。一人は筋骨隆々の巨人。もう一人は長い髪を異様に逆立てており、明らかに普通のゾンビとは雰囲気が違う。

「たぶん襲い掛かってきたなら知っていると思うけれど、私はレミリア・スカーレット。そこにいるのが紅美鈴よ。貴方たちのお名前は？」

「……これから殺す者に名前を教える必要があるの？」

女の答えに、レミリアはやれやれと肩をすくめた。

「相手が名乗つたらちゃんと答える。最低限の礼儀だとは思わない？」

それに貴女の墓を作ろうと思つたときに名前が分からなかつたら困るでしょ」

「……パチュリィ・ノーレツジ。そこにいる一人はタルカスとブラフォードよ」

それを聞いて、レミリアは少し驚いた。女の名前は知らなかつたが、残りの二人の名は聞いたことがある。メアリー・スチュアートの最強の騎士たち。それほど昔の死体をゾンビにできるというのは驚きだつた。

「なるほど……ディオも面白い趣向を凝らしてくるわね。……ジャック！ 武器を！」

潰れた馬車の残骸からジャックが身を起こした。手には黒金の槍を持つており、主人の姿をみとめると、槍を投げて寄越した。それを受け止め、レミリアは切つ先をパチュリィに向けた。

「……さあ、始めましょうか。生ける……いや、死した伝説との闘いを」

## 戦闘舞踏

火花が散り、一瞬だけ闇を照らした。鍛え抜かれた黒金ーレミリアの槍と、タルカスの大剣が衝突し、甲高い悲鳴をあげていた。

「……下等なゾンビのくせに、よく私の槍を受け止められたわね？」

「俺は殺戮のエリート。当然だ」

タルカスはそう答えるながら、目の前の少女が繰り出した一撃が戦場でまみえたどの敵のものよりも重いことに、戸惑いを感じていた。彼はレミリアを見すえながら、ゆっくりと口を開いた。

「ノーレッジ」

「なに？」

「奴も人間ではないな」

「……そうね。でも、貴方とブラフオードの二人がかりで倒せない敵かしら？」

パチュリーの言葉には、二人を心配するような気配はなかつた。彼女は単に試作品がどこまで闘えるか、という一点にのみ関心があるらしい。しかしタルカスの方も、同じディオの部下とはいえ、彼女に対しては何の関心もいだいてはいなかつた。

「当然。お前はそこで見ている。……といつても羽虫が邪魔だろうが」

レミリアと騎士二人が闘ついているため、手の空いているジャックがパチュリーのもとへ切り込んできたのである。ジャックは筋肉を収縮させ、体内から無数のメスをパチュリーに向かつて発射した。

「わざわざ言わなくても知っているわ。だからー」

まつすぐ伸ばしたパチュリーの手のひらにいくつかの火の玉が生まれたかと思うと、うねる爆炎と化した。高熱に触れたメスは、その威力を発揮することなく蒸発した。

「貴方は貴方の相手に集中しなさい。この闘いは実験も兼ねてるから」

言われなくても、分かつていてる——タルカスはそう思いながら、レミリアの攻撃を受け続けていた。雨のような連撃。攻撃と攻撃の間にそれらしい隙は見つからず、一息をつく暇もない。

「ブラフオードッ！」

「2対1というのは好きではないが……指示だ。仕方ない」

タルカスと打ちあうレミリアの背後にブラフオードが回り込んでいた。レミリアはタルカスに槍を向けていたため、この瞬間は後ろに武器を回して防御することはできない。完全な死角からの攻撃である。ブラフオードは、彼女の肩に剣を振り下ろそうとし——ぴたりと止まつた。

「あら危ない。うつかりしていたわ」

レミリアはブラフオードの剣先を人差し指と中指でつまんで止めている。恐るべき膂力。しかし、ブラフオードの本領はここからなのだ。

ブラフオードの長髪が剣をつたつてレミリアの白い腕に絡みついだ。予想外の奇襲に、レミリアの目が驚きに見開かれる。

「動きは封じた。タルカス！」

「おう」

タルカスは振り上げた長剣をレミリアの脳天めがけて打ち下ろした。巨岩でも素手で穿つような腕力である。たとえ彼女が人ならざる者だとしても、死を免れることはできなかつただろう。一当たりさえすれば。

剣はレミリアの右肩に深く沈み込み、鮮血を迸らせていた。直撃の瞬間、レミリアは首をそらし、頭部への一撃を回避していたのである。「不意を打たれたとはいえ……なかなかやるじゃない。ドレスが破けたのは気に入らないけど」

レミリアがそういう間に、彼女の肩から流れる血は止まつっていた。千切れたドレスからのぞいた肌にはさきほどまでぱつくりと開いていた傷はどこにもなかつた。

この異様な再生力。怪力。タルカスは、彼の主、ディオと同じ種類の存在であると直感した。

(だが……それでこそ倒しがいがあるというものツ!)

自分よりも強大な敵。その出現に際しても、タルカスの戦意に搖らぎは微塵もなく、意識をレミリアにのみ集中していた。そのため、背後から迫つてくる敵——紅美鈴に気づくのが一拍遅れた。

「シツ!」

するどい気合とともに、美鈴はタルカスの頭部めがけて蹴りを放つた。タルカスはとつさにかわしたが、完全に回避することはできず、頬をかすめた。わずかな波紋の痛みとともに、頬の皮膚が少し溶けた。

「お嬢様。たかがゾンビといつても二人がかりは面倒でしょう。少しの間、私がタルカスを引き受けます」

「……分かつたわ。じゃあ私は彼と踊りましょう」

レミリアがそう言うと、ブラフオードはにやりと笑った。レミリアの腕は彼の髪にいまだ戒められており、動かせないのである。

「腕も使えずどう俺と踊るのか、お聞かせ願いたいね」

「あら、じやあ教えてあげましようか。空のワルツよ」

瞬間、レミリアの背中から光をすべて吸い込むような翼が現れ広がる。ブラフオードがあっけにとられている間に崖に向かつて跳躍した。

レミリアが飛翔するには、いくつか条件があった。何らかの魔術的な力を持つていなければ吸血鬼も物理法則を超えることはできない。鳥類のように飛ぶために軽量化された身体ではないため、ブラフオードのように重い物を抱えた状態ではゆっくり下降することはできても空へ飛び立つことはできないのである。

高所から落ちて飛翔力を得る場合は、その限りではないが。

二人はすさまじい落下と上昇を繰り返し、空中で闘っていた。ブラフオードは髪をレミリアに絡みつけ、命綱の代わりにしている。

「さすがにここから落ちたらゾンビでも原型は留められないでしようね」

「……それがどうしたア…水中だろうと空中だろうと、命じられた敵と戦うのが騎士というものだ」

ブラフオードはそう言うと、首筋めがけて剣を閃かせる。レミリアはそれを間一髪のところでかわしながら、未知の戦場であるはずの空中においてブラフオードが一切戸惑わず対応してくることに、心のうちに賞賛していた。

（……しかし、この髪を引きちぎるのは時間がかかるわね。かといってこれくらい近いところにいるヤツの剣を躊躇続けるのも無理がある）

だとすると、「アレ」しかない。あまり気のりしない手段なので、でかけるならしたくはないことであるが、この猛騎士に対処する方法を一から考へていて暇はないのである。

レミリアは頭をわずかに傾げブラフオードが放つた渾身の突きをかわすと、その伸びきった腕に噛みついた。

「……貴様ツ！ 何を……」

死臭。緑茶よりもひどいえぐみと苦みがレミリアの口内に溢れた。しかし我慢して噛み続ける。レミリアのとつた最後の手段。それは、ブラフオードがゾンビ化したときに入つたであろうティオの吸血鬼のエキスをレミリアのエキスと交換することだつた。

ゾンビが吸血鬼を主とみなすのも、そのエキスの効果。つまり、ブラフオードを動かすエキスがレミリアのものになつてしまえば、レミリアの配下にすることができるという道理なのである。

「……まあ、何百年も前の死体なんか本当は噛みたくないんだけれど」ブラフオードは眼を閉じぐつたりと動かなくなつた。

レミリアはゆっくりと崖下へ降下し、着地した。

少しして再蘇生したようだつた。ブラフオードはゆっくりと目を開き、レミリアを見た。その眼の中には先ほどまで存在していた敵意はない。

「……失礼な真似をした。わが主人よ」

そう言うと、ブラフオードはレミリアの腕を縛つていた髪をほどき、跪く。

「気にしてないわ。どうせデイオに都合のいいように、生前の妾執を利用されたんでしょう。そんなことより、いくつかやつてもらいたいことがあるわ」

「このブラフオードができることであれば何なりと」

「よかつた。じゃあ、まずはデイオの居るところに案内してもらおうかしら」

〔御意〕

後は崖上で闘っているであろう美鈴とジャックを回収して、デイオに会うだけ。ブラフオードを伴うため崖の上に戻るのに多少の時間はかかるが、これで駒は揃つた。

「待つていなさい、デイオ。夜はこれからなのだから……」

美鈴は、自分がそれなりに計算高い性格だと思つていた。いつでも強い者の傍にいて、不興を買いそうなならとほけたふりをしてうまくかわす自信もある。

ただし今回計算違いだったのは、タルカスが美鈴の想像の数倍も手ごわかつたことだった。

〔ウオオオオオ！〕

タルカスは雄たけびをあげ、剣を振り下ろしてくる。美鈴はきわどく太刀筋を見切つて回避する。その一撃が地を叩くとたちまちひびが入り、地割れをおこした。

「すさまじいパワーですね……近づくのは正直、得策ではない」

美鈴の赤い髪が一筋、空中で舞つていた。今の剣が当たつていれば、たとえ美鈴が波紋使いだつたとしても大ダメージは免れなかつただろう。

（まずは視界を奪わないと）

美鈴は切り裂かれた自分の髪の毛を掴むと、波紋を送り込んだ。すると髪の毛はぴんと伸び、何本もの針へと変じる。

タルカスの猛烈な攻撃をぎりぎりのところで回避し、最後の大振

りの直後、大きな隙ができた瞬間に顔めがけて投げつけた。

「GYAAAH！」

タルカスの左目に、3、4本ほど美鈴の波紋入りの髪が突き刺さつていた。少量ゆえタルカスに致命傷を与えるほどのダメージは与えられなかつたようだが、ダメージは通つたようだ。

「この、小娘があつ！」

左目が潰れているにもかかわらず、タルカスは躊躇なく襲いかかって来た。波紋傷を負つた怒りでますます攻撃のスピードは上がつているが、その流れは単調になつていて。

（次は右目ね）

美鈴が残つた髪に波紋を送り込もうとしたそのとき、ひやりと背筋に悪寒が走つた。瞬間、炎の奔流が美鈴の数センチ脇を駆け抜けた。熱風から顔を背け、転がるように離れる。

「タルカス……こつちは終わつたわ。手伝つてあげる」

パチュリーダつた。その後ろには黒く焦げ、炭化したジャックの残骸がある。つまり、ジャック亡き今、美鈴はたつた一人でこの化け物二人組と闘わなくてはならないのだ。

レミリアがいれば何とかなつただろうが、タルカスの剣とパチュリーの炎を同時に相手どるのは不可能。斬り捨てられるか、バーベキューにされるのが落ちである。

美鈴は波紋を込めたひとふさの髪を落とし、両手をあげた。

「まいりましたね……降参です」

「そういうことはしなくていいわ。私たちはあなたたちを殺すために来てるから」

パチュリーはそう言つて、右手を美鈴に向けた。

「私があなたの実験の役に立つと知つても？」

パチュリーダは、タルカスたちの闘いを実験と呼んだ。そこから、彼女の行動原理はディオとは違うのではないか——平たく言うと、レミリア達の抹殺より己の知的好奇心を満たす方を優先するのではないかと思つたのである。

「……どういう風に、役に立つの？」

パチュリリーは右手を美鈴に向けたまま、そう聞いてきた。

「私はゾンビを滅するエネルギーを体内で作り出すことができるのです。皆は波紋と呼んでいるようですが…知りたくないですか？」

「波紋…確かに、貴方が不思議な力を持つていることは分かつていたけれど……」

パチュリリーは少し考えているようだつた。あともう一押しがあれば、何とかこの場を切り抜けられる。

「私を研究すれば、波紋がゾンビに及ぼす影響だつてわかるはずですよ…？」

「……どうでもいいッ！　この女を殺すのもディオ様の命令だつたはずだが」

タルカスは苛立ちを滲ませながら、パチュリリーにそう言つた。目を潰されたことで相当頭にきているらしい。

「ええ。でも…いつ、どこで殺すかは決まっていないでしよう？　タルカス、縄でこの女を縛つてちようだい。連れて帰るわ」

「俺は冗談が嫌いだ」

「冗談？　連れ帰る方が殺すよりもディオの役に立つわよ」

「俺の目を潰したんだ。気が取まらん」

「用済みになつたらあとで絞るなり四肢をもぐなりすればいいじやない。今は私の指示に従つて」

タルカスは舌打ちをすると、美鈴を縛り上げて脇に抱えた。

「ああ、逃げようとしたらすぐに殺していいわ」

「……だそうだ」

タルカスに睨まれると、美鈴は引きつった笑みを浮かべた。

「あはは、逃げるわけないですよ。私、身の程は知つてますから」

「ブラフオードとともに谷の底へ落ちていつたレミリアだが、吸血鬼ならあの程度では死はないだろう。そしてここに戻ってきて、美鈴の残した「あれ」を見つければ、ディオの住処へと向かうことができるはずだ。

（頼むから、ちゃんと戻つてきてくださいよ、お嬢様）

美鈴はそう祈りながら二人に運ばれていった。

横倒しになつた馬車、何者かの攻撃で生まれたらしい地面の亀裂、黒焦げの死体。

「これは……先に行つたレミリアの馬車だな。ここで襲われたのか」ジョナサンとツエペリはあたりを警戒しながら、馬車の様子を見ていた。そのとき、死体を調べていたスピードワゴンが戻ってきた。「どうやらこの死体は御者ゾンビのもののように。あの二人は見当たらねえ。あいつらが簡単におつ死ぬとは思えないから、たぶん馬車を捨てたんだろうが……」

問題は、彼らを襲つた者の正体である。

「……ディオの部下か、それに協力する者だろう。少なくとも炎使いが一人。あつちはいくらでもゾンビを増やせるわけだし、これは早めにケリをつけんといかんのう」

ツエペリがそう言つたとき、がさり、と近くの草むらが揺れた。  
「誰だ？」

ジョナサンが静かに誰何したが、返答はなかつた。

「答えろーッ！俺たちの敵かてめーはツ！」  
「ひつ、ひイイイ！違う！違うよーッ！」

スピードワゴンが一喝すると、中から転がり出てきたのは、何の変哲もない、田舎っぽい少年だつた。

「ツエペリさん、彼は……」

「うむ、ゾンビじゃがない」

ジョナサンは怯える少年の肩をたたくと、かがんで目線を合わせた。

「僕の仲間が脅かしてすまなかつたね。僕はジョナサン・ジョースター。君の名前は？」

「ポ……ポコ」

「ポコ、君はここで何が起つたか知つてるかい？」

ジョナサンの問いに、ポコはうなずいた。

「で、でも、話してもあんたたちは絶対信じないよ」

「いや信じる。だから、君がここで見たことすべてを教えてほしい」  
ジョナサンがそう言うと、ポコは遠慮がちに語りはじめた。

数日前から、ポコの住む町に奇妙なことが起こり始めた。年頃の娘が何人も、忽然と姿を消すのだ。さらに女の亡靈やよみがえった中の騎士たちが墓場でうろついているという噂も流れていた。

「だからおいら、それを確かめるために墓場に行こうと思ったんだ」そして墓場に行く途中、黒い馬車がこちらへ走つてくるのが見えた。町の大人に見咎められたら面倒だと思つたポコは、近くの草むらに隠れた。

その瞬間、遠くから飛来した岩が馬車を貫いた。  
あっけにとられていたポコの前に、二人の黒騎士と、それを従えるようになじのローブをまとつた女が現れた。亡靈とゾンビだ、と直感したポコは息を殺してその成り行きを見ていた。

すると中から現れた者たちと死者たちは二三言言葉を交わしたかと思うと、すぐに殺し合いをはじめた。しばらくして戦いの趨勢は決まつた。馬車側の一人はローブの女に焼き殺され、一人は宙を舞つたかと思うと、黒騎士とともに谷へと落ちていつた。最後の一人は捕虜にされ、ポコの住む町の方へ連れていかれた。

それからも震えが収まらず、繁みでじつとしていたときにジョナサンたちがやつてきた、というわけである。

話を聞き終えたツエペリは少し考え、話し始めた。

「なるほど。宙を舞つた、ということは、黒騎士と共に落ちていつたのがレミリアで、捕まつたのは紅美鈴、というところか。まあ空を飛べる吸血鬼がそんなことで死ぬとは思えないがね」

それについてはジョナサンも同意見だつた。問題は、彼女の後を追つてディオの居場所を探ることができなくなつたことである。

「とりあえず、ポコの住んでる街に案内してもらいますか」

おそらく、デイオはポコの街にあるどこかの屋敷を根城にしている。そこまでわかれればあとはしらみつぶしに探していけばいつかは見つかる。

「うむ。もつと早く見つける方法があれば…」

ツエペリがそうつぶやいたとき、スピードワゴンが妙な顔をして足元を見た。

「うわっ！ なんだこりやあ……髪？」

そこに落ちていたのは、針のようにぴんと張った赤い髪だった。おそらく敵との闘いで切断されたのだろう。

「これは……波紋が込められていますね」

「闘いの途中で使つたんだろう。波紋を込めれば薔薇だろうとパスタだろうと武器にできるからな」

「へえ…」

そのとき、ジョナサンの手のひらの上で美鈴の髪がコンパスのように回り始め、方向を向いて止まった。

「……ツエペリさん、これはひよつとすると、紅美鈴の居場所を示しているんじゃないでしょうか？」

「うむ、わしは中国風の波紋法はよく知らんが、生命磁気の波紋を応用してるのかもしだんな。……ともかく、居場所が早く突き止められるのはありがたい。行くぞ、ジョジョ」

「おいガキ！ ゾンビに殺されたくなきやお前も一緒に馬車に乗りな！ 街まで送つてつてやる！」

4人が乗り込み再び馬車が走り始めたとき、ジョナサンはツエペリの言葉を思い出して、質問した。

「中国風つて言つてましたが、ツエペリさんの知らない波紋の使い方もあるんですか？」

「そうだな。わしはチベットで修業したからチベット式になるか。まあ、チベットのやり方でもわしの知らない使い方……運命を読み取る力なんぞはついに会得できなかつたな」

「運命？」

「生命の波長から、死期を読むんだ。それができるのは私に波紋を伝

授してくれた老師トンペティくらいだろうな

「死期……ツエペリさんは自分の死の運命を聞いたんですか？」

「いいや、私は聞かなかつた……自分がいつ死ぬか知ってるなんていい気分じやがないからな」

ツエペリの顔は濃い影に包まれていてよく見えなかつた。

ポコを家に帰して一行はデイオの潜む場所へと導かれていった。そして、ある屋敷の前で美鈴の髪がどこを指すでもない回転を始めた。

「ここか…」

町はずれにある、年月がたつてはいるが瀟洒な屋敷だつた。鉄柵は鏽び、庭には手入れが行き届いてない。なんの変哲もない古屋敷だつた。しかし、ジョナサンは吸血鬼のもつ瘴気が屋敷全体にまとわりついているように感じた。

「スピードワゴン君……ここまで我々は運よく戦わずにするんだ。しかし今からはそうはいかない。戻るなら今のうちだ」

「それで俺がしつぽ巻いて逃げるとと思うかい？ ツエペリの旦那」

「……杞憂か。じゃあ石仮面を拝みにいくとしよう」

ニヤリと笑うと、ツエペリは屋敷の扉に手をかけた。

## 東方より来たる

ジョナサンたちは屋敷の一階を歩き回り、ディオを探した。数体のゾンビと出会つたが吸血鬼と比べるとやはり弱く、それほど警戒する必要はなかった。

ただ、犬と人間を組み合させた者や手足を逆に付け替えられた者など、奇妙な姿をしたゾンビが多かつた。波紋傷が広がり溶けていくへビ入りゾンビ（ドゥービーというらしい）を見て、スピードワゴンは顔をしかめた。

「ディオつて野郎はとここん悪趣味だな」

「趣味のいいやつならそもそもゾンビなんか作らんよ」

そう言つたちようどそのとき、ツエペリは地下へと続く階段を見つけた。

「地下はまだ見ていなかつたな。行くぞ」

一行が階段を降りていくと、ほんのりとゾンビの臭いが漂い始めた。プラスコやビーカーなどの器具が散乱しており、紫色の液体が水たまりを作つている。

「こゝは……ディオの実験室か？」

「……どうでしょう。ディオが使つてゐる場所ならもう少し整頓されていそうですが」

やがて足の踏み場もないほど本の置いてある部屋を見つけた。ジョナサンたちがその中に踏み込むと、縄で手足を拘束され、机の上で転がされている人物がいることに気がついた。

「あ、あなた方は……えへへ、どうもお久しぶりです」

紅美鈴だった。激しい闘いの末捕まつたのだろう、着ていたチャイナドレスはところどころが裂け、疲労困憊しているように見えた。「スピードワゴン、彼女の縄を解いてやつてくれ」

「いいんですか？」

「ああ」

スピードワゴンが縄を解いてやると、美鈴は身体についた埃を払いながら立ち上がった。

「……やれやれ、ひどい目にあいました。お嬢様とははぐれるし、ゾンビだらけの屋敷に運び込まれるし。ジョースターさん、ありがとうございます」

「気にしなくていいよ」

「いやあ、あなた方がお嬢様より先に来るとは思つてませんでした。今どこで何をなさってるんでしょうねえ」

美鈴はレミリアの生存を信じて疑つていないようだつた。そんな彼女を見て、スピードワゴンは不思議そうに言つた。

「……そういうあんたは、なんで人殺しの怪物についていこうと決めたんだ？ いくら金払いがよくても、何がきつかけで自分が殺されるかわからないだろ？」

「まさか。お嬢様はよほどのことがなければ人間を殺したりはしませんよ」

「じゃああのゾンビは何だつていうんだ。殺さなきやゾンビは生まれないだろ」

ツエペリは片眉を上げた。

「ほう、どういうことかね？」

「彼が殺人鬼だつたからです。ジャック・ザ・リッパー。……まあ、あの女の炎で燃えカスになつてしまひましたが」

「なるほど……だから『殺して構わない』と。少々彼女は言葉が足りないんじやないかね」

ジョナサンと話すときにはレミリアが一瞬だけ浮かべた、悲しみに近い表情を思い出した。彼女の表情は、吸血鬼と化して自分を襲つた父親と比べるとはるかに穏やかだつた。ツエペリは少し考えて、ジョナサンの方に向き直つた。

「ジョジョ。今のは本当だと思うか」

「はい。らしいです。彼女が人を殺してしまつたことには変わりはないけど……少なくとも、理由もなく人を殺すような人間だとは思わな

い

「……それなら、わしらが倒すべき悪は一人だけだな」

ツエペリはあつけらかんとそう言つた。

「じゃあ、私も無駄にあなたと喧嘩しなくて済むんですね」

「ああ。むしろディオを倒す手伝いをしてほしい」

ツエペリが握手しようと手を差し出した。しかしそのとき、何者が階段を降りてくる気配がした。それを察知したジョナサンが階段の方へ向き直り、油断なく拳を構える。

「……誰よ、あなた達」

そこに現れたのは部屋の主、パチュリー・ノーレッジだった。

そのとき、パチュリーは苛立っていた。

レミリアという奇妙な少女との戦いで試作品であるタルカス、ブラフォードの強さをテストすることはできた。しかしブラフォードは谷底に落とされたし、タルカスは片目を喪つた。あの高さから落下すればブラフォードは原型をとどめていないだろうし、残つたタルカスも吸血鬼と違い身体が再生しないため、別の死体から目を移し替えるという余計な手間がかかる。

おまけに火炎の術を多用したために煙が肺に入り、持病の喘息がひどくなつていていた。そのためパチュリーは地下室に美鈴を置くと、いつたん喘息の薬を取るために一階へ上つていった。

（まあ、あの美鈴とかいう女は利用できるわね）

波紋がゾンビや吸血鬼の細胞にどのような影響を与えるのか。波紋耐性をどうすればつけられるか。試してみたいことはたくさんあつた。

しかし、パチュリーが美鈴を置いていた部屋に戻ると、見知らぬ男が3人ほど増えていた。どうやら美鈴を助けに来たらしい。

「皆さん、気をつけてください！ ディオの手下——火炎を自在に操る奇術師です！」

そう言う美鈴を見ながら、パチュリーは面倒になつたと思つ

た。屋内では炎を使いづらい。ましてこの地下室では、大事な本も燃えてしまう可能性がある。

どうすれば一人を実験用に捕獲し、残りは皆殺しにできるかという算段を立て始めたパチュリーに、大柄な男ージョナサンが声をかけてきた。

「……君は、吸血鬼でもゾンビでもないようだが……なぜ奴の味方をする？」

「別に。私はただ研究がしたいだけだから。私の研究やデイオのせいで何人死のうが私のあざかり知るところじゃあないわ」

「どうしてもその研究はやめるつもりはないのか？」

「ええ」

パチュリーはそう言うと、右手から青白い火炎を立ち昇らせた。本を燃やしたくないので勢いを抑えており、人を殺せるほどの威力はない。この炎で牽制しながら部屋の外へ出て、そこで一気に勝負を決めるつもりだった。並の人間ならここで突っ込んでくることはないはずである。

そう思いながらパチュリーが後ずさり階段に足をかけたとき、大柄な男——ジョナサンはつぶやいた。

「それなら、君も野放しにするわけにはいかない」

ジョナサンは床を蹴ると、真っすぐパチュリーへと突進してきた。  
「く、黒焦げになりなさい！」

パチュリーの炎がジョナサンを包み込む。が、ジョナサンは一瞬たりとも怯むことなく踏み込んでくる。ジョナサンの精神力は「並」というには強靱すぎた。

炎の中を構わず進んでくるジョナサンを見て、パチュリーはわき目もふらず階段を駆け上がる。と、その瞬間、こおおん、と何かが反響するような音がしたかと思うと、電撃を浴びたような衝撃がパチュリーの身体を襲つた。

「波紋疾走の音が澄んでるな。あんさんもなかなかやるようじやのう」

「それほどでも」

これが「波紋」か、とパチュリーは直感した。おそらく美鈴が壁を伝うこの力でパチュリーの逃走を妨げたのだ。

「もうつ、どいつもこいつも……私の足を引っ張つてツ！」

パチュリーとジョナサン、互いに手が届くほど距離を詰めた二人の間の空気が揺らいだかと思うと、鋭利な真空にジョナサンの右手が巻き込まれ、血しぶきがあがる。が、それでもジョナサンの動きは止まらない。驚愕に目を見開いているパチュリーの手を掴んで引き寄せる、ジョナサンは目を覗き込みながらこめかみに人差し指を当てる。

「なつ、なんで……あれで動け…」

「僕には、腕を失うくらいの覚悟があるからだ。すまないが、眠つてもらうよ」

ジョナサンがそう言うと、こめかみに奇妙な感覚が走った。まぶたが鉄のように重くなり、意識が遠のく。

「わ……たしに何を」

した、と聞く前に、パチュリーの意識は水面に浮かぶ泡沫のようにはじけ、消えた。

月を照らす野道を、レミリアとブラフォードは疾駆していた。どうやらディオは際限なくゾンビを増やしているらしく、道中のあちこちで元は住民であつたであろう者たちと遭遇した。

「けけけーっ！ そこの小娘エ、ジューシーな血をたあっぷり飲ませてくれ！」

レミリアはそのゾンビを一瞥すると、その傍を目にもとまらぬスピードで駆け抜けた。ゾンビは振り向き襲い掛かろうとしたが、すでに両断されていた首が身体についていかず、落下して地面に血をしみこませた。

「屍生人が屍生人を作る……こんなつまらないもので満たされた世界

の頂点に立つたところで、何の意味があると思つてゐるのかしら?」

ブラフオードは黙つたままだつた。レミリアは今の言葉がブラフオードにとつて意味するところにはつと気がつき、付け加えた。

「ああ、別にあなたを無価値だと皮肉つたわけじやないわ」

「わかっております。それに私が無価値だということも正しい」

今、レミリアはブラフオードの魂を操つてはいない。ジャックの場合は殺人本能を抑えるためしつかり手綱を握つていたが、ブラフオードの忠誠心は信用できるので、無理に心を縛る必要もない。つまり、ブラフオードの言葉は生前と変わらず彼の自由意志によつて紡がれているのである。

「私の本来の主は女王陛下だつた……あの方を守れなかつた時点で、私には芥ほどの価値もないでしよう。あの憎きエリザベスもノーレッジによるとどうの昔に死んでいるらしく……敵討ちも果たせすじまいです」

「そう……じゃあこの戦いが終わつたら貴方はまた死人に戻りたいの?」

「はい。願わくば、タルカスも同じくあの世へと送つていただきたい。奴も女王陛下のいらつしやらないこの世には興味はありますまい」

当時のレミリアはプラハにいたため彼らとメアリーの関係については深く知らなかつた。しかし、永遠の眠りを妨げられ、いまだに亡き主を想う姿には多少の憐憫を覚えた。

「……まあ、ことが済んだらそうしましようか。だけど、一つ提案があるわ。貴女を塵に還す前に——」

レミリアがそう言いかけた瞬間、行き先をふさぐかのように男が立つていた。二人が立ち止まるとき、その男はつかつかと向かつて来る。

「失礼。町はずれに屍生人がはびこつてゐるようでね……そこのお二方はどつちかね?」

「本当に失礼な質問ね。私——レミリア・スカーレットをゾンビと一緒にしないでちようだい。これでも吸血鬼よ。こつちはブラフオード」

そう名乗ると、男はざらりとした眼光を放つ。

「そうか。わが名はダイアード。二人目の吸血鬼がいるなどおかしな話ではあるが……会つてしまつた以上、鬪わねばなるまい」

「そう……ところで、他の一人は出てこなくていいのかしら？」

レミリアがそう訊くと、ダイアードはぴくりと眉を動かした。レミリアの聴覚は、波紋使い特有のリズムを刻む二人分の呼吸音を聞き逃さなかつた。

「なかなか、耳ざとい貴婦人のようじやのう」

そう言つて近くの木影から現れたのは、煙草をくわえた老人と、流麗な黒髪の若者だつた。若者が老人にやや心配そうな声音で話しかける。

「トンペティ師……我々の目的はこの娘ではないはずです。早く行かねば手遅れになるかもしません」

「案ずるな、ストレイツオ！　このダイアードが一瞬で力タをつけてやる」

ダイアードは地面を蹴ると、スローな蹴りを繰り出してくる。レミリアはくすりと笑つて、槍を構える。

「ええとこれは……稻妻十字空烈刃、だつたかしら？」

それを聞き、ダイアードの瞳が揺らいだ。これは知つてゐる。蹴りをわざと受け止めさせ、腕を封じてから本命の手刀で決める必殺の技。吸血鬼になつて間もないころに吸血鬼狩りに食らつたことがあり、その威力は十分知つていたし、どうすればよいかも分かつっていた。

レミリアは槍でそろえた両足を真横から薙ぎ払つた。痛撃を受け、ダイアードは受け身を取りながら地面に転がつた。

要は、蹴りを受け止めなければいいのだ。スローとは言つても、人間の格闘者であれば受け止めざるをえない。しかし吸血鬼の動体視力であれば完全に見切ることが可能なので、ネタが割れてしまえばどうということはないのである。

「ぐう……ッ」

「あら、立てるのね。私、あなたみたいな無礼な人が嫌いだから、足をめちゃくちゃにしようと思つてたんだけど……なかなかやるじやない」

地を這うダイアードを見下ろしながらレミリアは話はじめた。

「悪いけど、今は貴方たちと鬭つてる暇はないの。しかし、ツエペリといい貴方たちといい、どうしてこう波紋使いには早とちりが多いのかしら？」

「……ツエペリだと？ その名をなぜお前が知っている」

「あら、知り合いなの？ ……というより、ディオを倒すためにツエペリが貴方たちを呼んだ、と考えるのが妥当かしら」

トンペティは眼を細めた。ツエペリのしたためた手紙にはディオを倒すのに力を貸してほしいということが書いてあったが、目の前には二人目の吸血鬼——レミリアがいる。予想以上に敵の勢力は大きいのではないか。

「ツエペリはどうした？ それと、ジョナサン・ジョースターという青年もいただろう」

「ああ、別にどうもしてないわ。そもそもジョナサンは私のお気に入りだし、私は殺人狂ではないから」

「殺人狂じやない？ 血を糧にするのにか？」

ストレイツオの問いにレミリアはうなずいた。

「ええ、血を飲まなくとも何十年かは生きられるし、食事をするにしてもめったに殺しはしないわ。貴方たちはミルクを飲むために牛を殺すのかしら」

変わり種の吸血鬼らしいな、とトンペティは考えた。従えているゾンビは時代遅れの鎧をまとっているのでおそらく自分で手をくだしたものではない。嘘を言つているように見えないし、嘘をつく意味がないので実際そうなのだろう。

「しかし仲間はそれを許すのか？ ディオを倒すとわかっていて見逃したのか？」

そう訊くと、レミリアは不快そうに眉をひそめた。

「あの下衆と私と一緒にしないでもらえる？ むしろ敵よ、敵」「敵？ 同じ吸血鬼なのにか？」

「人間だつてスプーンの置き方が違うだけでも殺し合うじゃない」レミリアはそう言つてため息をつき、懐中時計に目を落とした。

「……さて、そろそろ無駄話はやめて質問しましようか。貴方たちはここを通してくれるのか、私と闘うつもりなのかってね」

「ジョースターさん、大丈夫ですか、その腕！」

ジョナサンの右腕から付け根にかけてついた無数の切り傷から、血が流れていた。

「ああ、骨までは折れてないから、すぐ回復すると思う」

しかし、炎だけでなく風の刃のようなものまで作れるとは、とジョナサンは昏倒している奇術師の女を見て戦慄した。一気に勝負を決められなければ、レミリアの御者のように炭にされていたのはジョナサンの方だったかも知れないのだ。

「不思議な術を使う者だつたが……まあここで倒せたのはよかつたかもしねんな」

「ええ。ところでツエペリさん、ノーレッジは殺さないんですか？」

美鈴の問いに、ツエペリは難しい顔をした。

「悪意がない分、ある意味、デイオより危険なヤツだが……どうする、ジョジョ」

ジョナサンは少し考え、答えた。

「殺しません。彼女の研究は、デイオがいなければ続けられないはずです。罪は生きて償つてもらいましょう」

「……なら、とりあえず目覚める前に捕まえておくか。スピードワゴン君、頼めるか」

しばらくして、奇術師の女——ノーレッジは目隠しをされ、天井から吊り下げられた。術で縄を切ろうとすれば頭から落ちてしまうので抜け出ることは難しいはずである。

ジョナサンたちは地下室を出ると、二階への階段を上り始めた。濃い死臭がするのは、やはりそこにデイオとその配下たちが集まっているからだろう。

上り切った先には、大きな鉄製の扉が立ちはだかっていた。

おそらく、ディオはこの部屋にいる。ジョナサンが手を当て、力をこめると重い音を響かせながら扉は内向きに開いた。

中は大理石の柱が並び、瀟洒な調度がいくつか置いてあった。そして開け放たれたドアの向こうにはテラスがあり、そこで月光を浴びながらたたずむ人影があつた。

「……ディオ！」

ジョナサンが声をあげると、ディオはやおら振り向いた。

「ほう、お前が来たか……意外だ。お仲間はそこにあるのはスピード

ワゴンとかいうカスと、薬屋か……もう一人は初めて見る顔だな」

「ツエペリだ。ついに会えたな」

「ふん、お前がジョナサンの師か……仲良く二人で這いつくばつていればいいものを」

そのとき、ふつとディオの影が揺らめき、数を増やした。ぎよっとしたジョナサンが目を凝らすと、その正体はぐずぐずに腐った異形のゾンビたちだつた。ディオの配下らしい。

「そういえば下が騒々しかつたが……ノーレッジはどうした？」

「倒した。今、彼女には眠つてもらつている」

「ふん、相変わらず甘つちよろいやつだな、ジョジョ。俺はお前のそういうところが反吐ができるほど嫌いでね……」

パチン、とディオが指を鳴らすと、退路を塞ぐように信じられないほどの大躯をもつ隻眼のゾンビが現れた。

「タルカス……！」

美鈴がつぶやくと、そのゾンビはぎろりと彼女を睨めつけた。

「久しぶりだな。この眼の借りを返させてもらうぜ」

どうやらお互に因縁の相手らしい。それなら、背後は美鈴に任せ問題ないだろう。ジョナサンは、前にいるディオと対峙した。

「ジョジョ……お前どころして向かい合つたのは屋敷のとき以来か。……いや、あのときはレミリアが横槍を入れてきたから、エリナのとき以来、というべきか」

ジョナサンは黙つて歩みを進める。

「あのときはお前の爆発力に負けた……が、それは人間を超えたこの

「ディオにはもう通用しないということを、証明してやろう」

その瞬間、ディオは裂帛の気合とともに跳躍した。ジョナサンは目の前に迫つてくるディオの顔に、必殺の一撃を叩きこむ。が、直撃する寸前、ジョナサンの拳はディオに受け止められていた。

「……山吹色の波紋疾走！」

受け止められても問題はない。波紋を送り込めさえすればいいのだ

「これが波紋疾走、か」

しかし、ディオには全く効いていないようだつた。波紋が入つた感覚や反響するような独特な音もない。ふと冷氣を感じて殴つた右腕を見ると、完全に凍り付いてしまつっていた。

「この技は氣化冷凍法、とでも名付けようか。だから言つただろう、ジヨジヨ。俺はあらゆる人間を超えた。当然波紋使いもその範疇だ」ディオはそうつぶやき、冷たく笑つた。

## 決戦のとき

「は……波紋が通らない！」

右腕は凍り付き、ピクリとも動かない。氣化冷凍法。ジョナサンが波紋法を習得したように、ディオもまた新しい技を編み出していたのである。

「というわけだ……さア、お前の腕ごと頭をかち割つて中身をブチ撒けてやろうツ！」

ディオがジョナサンの脳天めがけて拳を振り下ろそうとしたとき、後方から飛んできた「何か」がディオを切り裂いた。

「おつと、ワシを忘れちゃあ困るぞ。何せ、語りたいことがいくつもあるからな」

ツエペリだつた。ゾンビたちを蹴り飛ばしながら、口に含んだワインを高圧で押し出したのである。

「人間の分際で、俺と対等に話すだと？ 笑わせる。……まあ、ワインに波紋を伝わらせるという工夫は褒めてやらんでもない」

波紋力ツターで傷を負つたディオの腕や肩から、蒸気が出ていた。ダメージは負つているが、微々たるものである。

（ディオに触れないように戦わなければ……）

ジョナサンは、凍つた右腕をかばいながら、ディオと一定の距離を保てるよう一歩後退した。闘いのヒントは、今ツエペリが示した。直接触れるのではなく、ワインのように「何か」を介して波紋を流すのだ。波紋を流せるもの、それは生物、液体、そして金属。

「かかつて来いよ、ジョジョオ！ 右腕凍らせられてしょげかえつてるのか？ なあ！」

突き進んでくるディオに、ジョナサンは近くにあつた薔薇を掴み取り、波紋を込めて投げつける。が、ディオが腕でガードすると、すべて凍つて床へ落ちてしまう。

「フン！ 時間稼ぎのつもりか？ さつきは不意を突かれたが、来る

と分かつていれば何ともない……さあ、もう下がれないぞ」

ジョナサンのすぐ後ろには、スピードワゴンがいた。そのすぐ後ろ

では、美鈴とタルカスが戦っている。

「……ジョースターさん、俺は闘いじや役に立てねえが、右腕を溶かす方法がある！」

「奇遇だな。僕は君を闘いに活かす方法を思いついた」

スピードワゴンは、自分の胸に凍つたジョナサンの腕を押し付けた。体温に触れたジョナサンの腕は、急速に解凍されていく。

「なるほど？ しかしその間、どうしてこのデイオが腕が溶けるまで待つと思うんだ？」

デイオはすでに、二人の鼻先まで迫っていた。

「今だ、撃て！」

銃声。6発の弾丸がデイオの脇腹に命中した。しかし、デイオの動きは止まらない。銃弾は命中していたが、触れた瞬間に凍つたのか、貫通せずデイオの体表に残っている。

「無駄無駄無駄！ 学ばないな……警官隊から学ばなかつたのか？

俺には銃なんか……」

「もちろん、分かつてる。だが、銃弾は金属だ。金属なら、触れれば波紋が通るんだ。たとえ凍つっていても」

ジョナサンの左拳が、デイオの脇腹——正確には、そこに残っていた傷口に叩き込まれた。

「しまつた！……とでも言えばよかつたか？」

デイオはにやりと笑った。ジョナサンの左腕は凍つていた。

「銃弾越しでも、触れていれば凍らせることはできる。どうだ、手も足もでないだろう？」

「……スピードワゴン、離れる。君まで凍る！」

ぱきぱき、という音がしたかと思うと、ジョナサンの足にも氷がまとわりついていた。

「詰チエックメイトみだ！ 止めを刺してやるツキヤスリング」

「……詰み？ それなら、私と交代キヤスリングするのはどうかしら？」

デイオとジョナサンは声がしたベランダの方を見た。声の主——

ミリアは翼を折りたたみ、音もなく着地する。

「いつも貴方がからむと遅刻するわね、ディオ」

「……いや、むしろ歓迎するための準備に時間がかかつたからな。ちょうどいい」

流石に背を向けたままというのはまずいと思ったのか、ディオはレミリアの方を向いた。

「もう夜も遅いし、早めに片づけるわ」

レミリアが槍を構えるのを見て、ジョナサンは気がついた。彼女はディオの氣化冷凍法を知らない。いくら吸血鬼でも、身体を凍結させられれば身動きが取れなくなる。

「気をつけろ！ ディオに触れたら一瞬で凍るぞッ！」

「なるほど、確かに厄介ね」

ディオの攻撃をバックステップで回避すると、レミリアはカウンターを叩きこんだ。しかし、槍はディオの腕を少しえぐるだけで止まってしまう。

「だから、俺には触れられないと言つていただろうが」

引きぬいた槍の先端が凍てついていた。もし数秒判断が遅れていたら、レミリアの腕も同じように氷結していただろう。

「そして、お前の翼は室内じやあ活かせない……さつき、キャスティング交代なんて言つてたが、それは違うな。お前は詰まされにきた、ただのマヌケと

いうことだ」

レミリアはきよとんとしていたが、やがて口を押えて笑い始めた。

「貴方、この氣化冷凍法以外にも切るカードは持つているでしょ？」

「……だつたらなんだ？」

「どうして、私の持つている力が翼だけだと勘違いしているのかしら」

(やりづらいですね)

タルカスの地を割るような一撃を紙一重で避けながら、美鈴はそう思つた。室内ということもあり、避ける方向が限られるのである。あの攻撃を受け止めることなどできるわけないので、スペースが無く

なれば即、死が待つてゐる。

「お前を殺したら、その目はもうぞ」

「死人が死人を弄ぶのですか……ぞつとしない話ですね」

美鈴はタルカスの死角に入つた。この狭い空間でかわし続けることができるのは前の戦闘でタルカスの片目を潰したこと抛るところが大きい。しかし相手も歴戦の猛者らしく、死角へ回ろうとする相手の動きを読んで引くので、決定打を放つには至らない。

「ちよこまかと逃げおつて！」

激昂したタルカスが剣を振りかぶる。縦に振り下ろしてくる一横に回避しようと身を沈めたとき、美鈴の脚ががくりと沈んだ。

「これは……血糊ですか」

敵味方入り乱れる激しい戦闘ゆえ、誰のものかはわからない。しかしその一瞬が命取りになつた。タルカスの一撃が、美鈴の左腕を切り飛ばしたのである。

「……ッ！」

美鈴は波紋で痛みを和らげながら、歯を食いしばつた。

「ハハハ、次は首だ……」

タルカスはそう言つて剣を持ち上げようとする。が、その腕は動かなかつた。

「……？」

タルカスの腕に水膨れのようなものができたかと思うと、一気に蒸発を始めた。

「まさかッ！　これは……」

「私の勝ちです。あなたの剣を伝つて波紋を流し込みました。……私の腕は飛ばされちゃいましたが」

波紋はタルカスの全身を巡り、ゾンビとしての機能を崩壊させ始めた。その顔は憤怒の色に染まり、美鈴をにらみつける。

「こうなつたら、せめて貴様を——

どん。

鈍い音がした。見ると、タルカスの胸から一本の剣が飛び出していた。

「……この剣は……裏切つたなブラフオード！」

レミリアと一緒に落ちたはずのブラフオードが、剣でタルカスを貫いていた。

「裏切つたのではない。お前のこの世での務めが終わつたことを伝えに来たのだ、タルカス！」

ブラフオードの腕に亀裂が走つた。美鈴の波紋が流れ込んでいるのだろう。それでも、長髪の黒騎士は剣を放さなかつた。

「GYAAAAAA！」

断末魔とともに、タルカスは塵すら残さず消滅した。ブラフオードは剣を下ろし、美鈴に一礼した。

「わが友が貴女にした非礼、代わつて詫びよう」

「は……はあ。あなたの主はディオでしょ。仲間を殺していいんですか？」

「今の主は、レミリア・スカーレット様。貴女と同じだ」

「な、なるほど……？」

さらにブラフオードの後ろから、3人の見知らぬ男が現れた。真ん中にいる老人がリーダーらしい。

「君がお嬢さんの部下、紅美鈴かね？」

「はい。あなたは？」

「わしはツエペリの師、トンペティだ。ダイア、ストレイツ、ツエペリと代わつてやれ！」

トンペティがそう言うと、傍にいた二人はツエペリと鬭つていたゾンビたちに飛びかかつた。

「ツエペリさん！　あんたは少し休んでろッ！」

「ああ……すまない、ダイアー」

ツエペリは下がると、トンペティに深々と頭を下げた。

「はるかチベットの山奥から……よく來てくれました」

「お札はスカーレット嬢に言うといい。彼女のおかげでこの場所がすぐ分かつた」

「そうですか……」

「それと、お前の死期が変わつているのも彼女のせいだろう。私が以

前告げた、お前がたどるであろう運命はすでに変えられている

それを聞いたツエペリは、目を丸くした。

「どういうことですか？」

「お前もよく知つてはいるはずだ。石仮面と波紋の力の性質は似ている。生と死、破壊と癒し、呪縛と解放、波紋は生の側、石仮面は死の側にあると言つていが。……それなら、わしがお前の死期を読んだのと同様に、未来を知る方法を彼女は知つているはずだ。すなわち、スカーレット嬢の本当の力は」

### 『運命を操る能力』

「……それが私の力。普段は大まかなことしかわからぬけど、フルパワーなら、戦いでも使えるレベルには正確になるわ。消耗が激しいから滅多に使わないけどね」

(運命を操る……?)

敵の力の正体がよくわからないが、少なくとも相手は『それで勝てる』と見込んでいるのである。警戒するに越したことはない——デイオは油断なく構えた。

「わからない? まあいいわ。どちらにせよ、貴方が消されるという運命に変わりはない」

レミリアは、一気に間合いを詰めてきた。

「得意の気化冷凍法だつて、結局あなたが意識しなければ凍らせることはできないんでしょう? だつたら、意識が追い付く前に、身体をえぐればいい」

槍がデイオの右腿をあっさりと貫いた。しかし、この距離なら絶対に「これ」はかわせまい。デイオの瞳孔がぱつくりと4つに割れ、圧縮された体液を射出した。

「そもそも読み通りね」

レミリアが身を沈めると、致死の弾丸は空を穿ち後方へと飛び去る。そして、立ち上がりざま、槍でデイオを斬り上げる。

鮮血が散った。今回も気化冷凍法によるガードは効かない。ここ

でようやく、ディオはレミリアの能力について理解した。

（やつが読んでいるのは、俺の動きかッ！　いや、動作だけではない。俺の精神の動き、周辺の情報、全てをひつくるめた未来を読んでいる……そういうことか）

つまり、レミリアはディオのどの部分に触れれば凍らないか、どう攻撃してくるかをすべて予知して戦っているのである。行動を読まる以上、彼女の前ではいかなる攻撃も防御も意味を失う。無敵の能力である。

「だが、それだけの計算をするなら脳に相当の負荷がかかるし、何よりエネルギーの消費が激しいはずだ。全開で戦闘できるのは数分といったところだろう」

「……当たりよ。でも、貴方がそれまでもつかしらね」

言い終わるや否や、レミリアの猛攻が始まった。冷凍する間もなく槍がディオの全身を穴だらけにし、腕で防御しようとしてもガードごと弾き飛ばされる。手下のゾンビが背後からレミリアに襲い掛からうとしても、振り向きすらせすその頭蓋を碎かれた。

（これは……ジョースター邸の時よりも凄まじいッ）

とはいって、頭部だけは絶え間なく冷凍法でガードしているためレミリアもディオを一撃で葬ることはできない。レミリアが力尽きたのが先か、ディオを削り切るのが先か。人間を軽く超越した戦闘は、ディオにとつて無限のように感じられた。

そしてついに、そのときは訪れた。

深いため息が、レミリアの喉から漏れた。爛々としていた眼には陰りがあり、疲労の色が見える。ディオは身体のほとんどがずたずたになっていたものの、まだ立っていた。

「耐えた……俺は耐えきった」

レミリアは押し黙つたまま、攻撃を仕掛けてこない。今の攻めでほとんどエネルギーは残っていないのだろう。

「時間切れだな。お前さえ殺せば……あとは簡単だ」

ディオが近づいても、レミリアは何もしなかつた。彼女の持つ槍を掴むと、レミリアの腕も凍り始める。

「……そうね。時間切れよ、ディオ。貴方の負け」

「なに？」

背後に何者が立つ気配がした。ジョナサンだつた。おそらく、レミリアと戦っている間に氷を溶かしたのだろう。手袋に火をつけたらしく、その拳は炎に包まれている。ディオは、それが何を意味するのかを察した。

「まさか……やめろジョナサン！」

「ディオ、これで終わりにしよう」

ジョナサンの拳がうなりを上げ、ディオの背中をえぐつた。冷凍法による防御は間に合わず、吸血鬼にとつての猛毒——波紋が体内で弾けた。

「G U A A H H H H ! 馬鹿なツ！ こんなことがツ！」

ディオはよろめき、テラスに出た。波紋が全身を駆け巡り、吸血鬼としての組織を破壊していく。

「さようなら、ディオ」

遠くからレミリアの声が聞こえた。そして、バランスを崩したディオの身体は、手すりを越え、崖下へ落ちていく。

「馬鹿な……このディオが死ぬ……死ぬのか」

意識が薄れる。間隔が遠のく。何も見えなくなる。静寂がやつてくる——

### 『ウインドナイツロットの謎

12月1日、一夜にして90人が行方不明となつた。原因も不明。警察の捜査によると、靴屋ラドクリフ・リドナーが8名のよそ者がある屋敷から出ていくのを目撃した。

彼らのうち一人は何やら奇妙な仮面を持ち出し、ハンマーで粉々に碎いたという。また、その屋敷の所有者であるノーレツジ婦人も行方不明になつており、屋敷から出てきた8人が今回の事件との繋がりがあると見て警察は目下捜査中である。

—ロンドン・プレ

## スより抜粋—』

### 『ウェストミンスター寺院の怪

12月2日の夜、寺院を巡回していた僧侶が2セツトの鎧を発見した。有識者の鑑定によりチューダー朝時代の騎士、タルカスとブラフォードのものだと判明した。メアリー・スクワートとともに眠りにつきたがっているのではないか?と院長は冗談めかして笑った。

—オカルト・レ

### 『ユニーク号』

#### 『12月盜難届

1, 棺	2, 硝子容器	3, 腕時計	4, ドレス（済）	5,
羊3頭	6, 係留中の船	7……		

—ロンド

### 『警察書類』

#### 『投資の天才スカーレット嬢

レミリア・スカーレット。今や、株市場で彼女の名を知らない者はいない。わずか一月で3万ポンドを稼ぐという衝撃的な活躍を見せた彼女は、二月には投資から引き揚げ東方へと向かうといふ。

彼女の保護者であるジョースター卿の命だという説、また東にチャーンスを見つけたとする意見もあり、彼女の行動は多くの財界人から注目されている。

### 『記事より抜粋—』

—ファイナンシャル・タイムズ1月28日

## エピローグ

「うおっ、なんだあいつら」

スピードワゴンとツエペリがジョースター邸へやつて来ると、その門の前には人だかりができていた。どうやら新聞記者らしくしきりに何かを話し合っている。

「おそらくあのお嬢さん関係じやろう」

「ああ、東の方へ旅行に出るんだってな。せつかく株で儲けたのに……飽きっぽいのかね、あの人は」

二人は記者たちに見つからないよう、裏に回つて壁を乗り越えた。すると、見知らぬ少女がごみを焼却炉に入れているところに出くわした。少女の髪と瞳の色は銀色で、肌はレミリアに劣らず白い。顔立ち的にスラブ系だろう。

「あなた方は誰ですか？　記者の方は外で待っているように言われているはずですが」

「わしはウイル・A・ツエペリ。こちらはスピードワゴン君だ。君は新米のメイドかね？」

すると、少女は眼を見開いた。

「すみません、お嬢様からはあなた方が来たらお通しするよう言われています。表の玄関から入ると記者がうるさいでしようから、こちらへどうぞ」

少女に案内され、二人は勝手口から中へ入った。そしてレミリアのいる部屋にツエペリたちを連れていくと、少女は一礼した。

「私はまだ仕事があるので失礼します。何かありましたらおつしやつてください」

「ああ」

部屋に入ると、レミリアは机に向かつて書類を作っていた。二人が入ってきたことに気づくとレミリアはペンを置き、大きく伸びをした。

「久しぶりね、二人とも。どう？ 最近うまくいってる？」

「あんたほどじやねーけどな。あやかりたいぜ」

「そんなに？ でも投資もいろいろ手間がかかつて面倒くさいのよね。今は取引を全部打ち切る書類を書いてるところよ」

「豪華客船にでも乗つて旅行に出るんだろ？ 羨ましいぜ」

そう言うとレミリアは首を振った。

「いいえ、妹を探しにいくの」

「妹……そいつは、ジョジョも言つてたな。嬢ちゃんに生き別れた妹がいるつて」

「ええ。実は昔から探してたんだけど、最近ようやく見つけた。イスタンブールにいるらしいわ」

イスタンブール。イギリスから遠く離れ、ヨーロッパとアジアの境にある都市である。

「そうか。じゃあジョースターさんは全く逆の方に行くんだな」「ジョナサンの新婚旅行ハネムーンを邪魔する心配がなくてよかつたわ」

ディオと組んですさまじい実験を行つていたパチュリー・ノーレッジは、ディオとの戦いの後ジョースター邸へと運び込まれた。彼女を警察に突き出されると石仮面について説明する必要が出てくるうえに、そもそも警察で彼女を管理するのは不可能だと思われたからである。

「私がいなくなつたらアレは何をするかわからないから。あと連れていくのは、美鈴とイザヨイくらいかしら」

「イザヨイ？」

「会わなかつた？ 銀髪の子よ。私が新しく雇つたのだけれど」

「ああ、あの子か。ずいぶん妙な名前だな」

レミリアはうなずいた。

「極東にある国の言葉らしいわ。ファミリーネームは美鈴が思いついたの。名前はこれから決めようとしてて……カエデ、イスズ、サクヤ……悩ましいわ。あの子の子孫に順番につけていくのもアリかしらね」

「ちょっと待て。その子には名前はなかつたのか」

「父親の切り裂きジャックからは、『お前』って言われてたらしいわ。でも、『お前』じゃあんまりでしよう？」

「切り裂きジャックの娘エ？」

スピードワゴンは素つ頓狂な声をあげた。あの殺人鬼に娘がいたのか。

「言つとくけど、あの子はいい子よ。いじめたら私が……つていうより美鈴がキレるわ」

「んなことしねーよ……それよりジョースターさんは？」

「ジョナサンはエリナと朝から街に出かけているわ。明後日の旅行に必要なものを揃えるとかで。たぶんそろそろ帰つてくると思うわよ」  
ウインドナイツロットから戻つてからが大変だつた。ジョナサンの父はレミリアが生きていたことを知らなかつたので、その姿を見てまず驚き、そして泣きながら抱きしめた。レミリアが赤面したのを見たのはあれが初めてだつた。

そして次の日の夜、ブラフオードが生前（？）に遺した言葉に従い、二人の黒騎士の鎧をメアリー・スチュアートの眠る寺院へ持つていつた。彼とは話してみたいことが多くあつたが、本人はゾンビとしての仮初めの生、そしてメアリーのいないこの世にいることを望まなかつた。

それからはエリナとの結婚準備や身の回りの雑務をこなす日々が続いた。そんな中、わずか2カ月前に起こつたあの悪夢のような闘いは、遠い昔の出来事のように感じられるようになつていた。

「じゃあ明日の結婚式にお邪魔するぜ、ジョースターさん」

「ありがとう。ツエペリさんも残りの石仮面の捜索を中断してまで来てくれるなんて……」

「なに、気にするな。これから会うことも少なくなるだろうからな」

ツエペリとスピードワゴンが屋敷を出たのは夜の9時だつた。ジョナサンが一人を見送つて自分の部屋に入ると、ノックの音がした。

「ジョナサン、いる？」

レミリアの声。ジョナサンはドアを開けた。

「どうしたんだい？」

「貴方の旅行について言つておきたいことがあるの」

レミリアは椅子に座り、話し始めた。

「貴方の旅の途中、よからぬことが起きるわ。下手をすると、命が危ない」

「なんだつて？」

レミリアの予言は当たるのだ。ここ数か月、彼女が株あげた巨額の利益がそれを裏付けている。ジョナサンは陰鬱な気分になつた。「まあ、細かいことは分からぬけれど、私がついていくわけにはいかない。私は妹……フランドールを捜すために東へ行きたいの」

「わかつてる。君にとつては大切な家族なんだろう。僕はもう十分助けてもらつた。今度は君の妹の番さ」

「そう言つてくれると思つてた。……でも、できる限りのアドバイスはしておくわ。とにかく大切な人から離れないこと。そして、怪しい者を見かけたらすぐにその船から脱出すること。間違つても絶対に追つちや駄目。そんなことしたら、エリナがあなたのどちらかが確実に死ぬわ」

それくらいかしらね、とレミリアは言つた。

「ああ、わかつた。……ところで君はいつ出発するんだい」

「貴方の結婚式が終わつたらすぐ」

「明日じゃないか。というか皆に知らせてないみたいだし……見送りに行くよ」

「結婚式に新郎が新婦を放つておくなんてふざけてるの？ いらぬわ。それに、道連れは多いもの。寂しくなんかないわ」

ジョナサンはレミリアの旅に随伴する面々を思い浮かべ、ふつと笑つた。

「確かにね。退屈もしなさそうだ。……妹を見つけたらここに戻つてくるかい？」

「そのまま東に行つてみようと思つてるわ。美鈴が案内してくれるらしいの」

「お父さんが寂しがるし。たまには帰ってきてよ」

「……考えておくわ。寄り道が多くなりそうだから、何十年後になるかはわからないけどね」

マイペースなレミリアらしい。果たしてジョナサンが生きている間にロンドンへ戻つてくるのだろうか？ そう思つたが、ジョナサンは何も言わなかつた。

「じゃあ、私はそろそろ戻るから。貴方も明日の結婚式に寝坊したらまずいでしよう？ 早めに寝たほうがいいわ」

「そうだね。おやすみ、レミリア」

「おやすみ、ジョナサン」

そう言うと、レミリアは部屋を出ていった。自室を支配し始めた静寂に少しの寂しさを覚えながら、ジョナサンとエリナの写つた写真を消した。

イスタンブールへ向かう船の上。レミリアは甲板の手すりにもたれ、空にいるカモメの数を数えていた。傍にいる美鈴はレミリアに日傘を差してやりながら、ジョナサンとエリナの写つた写真を眺めていた。

「いやあ、結婚式、一人とも幸せそうで良かつたですね」

「そうね」

「お嬢様、どうしたんです？ 淡白すぎません？」

「別に。ちょっと心配してるだけ。ところで美鈴、イスズは？」

「ノーレッジを連れてくるそうです。船酔いでグロッキーらしくて。風に当たれば治るんじゃないかなって」

「放つておけばいいのに。どうせ慣れるわよ」

「慣れますがねえ。ていうか、何で皆さんに船出が今日つて言わなかつたんですか？ 誰も見送つてくれなかつたじゃないですか」「…………ここから離れたくなるから、かしらね」

そういうもんですかね、と言しながら美鈴は港の方を未練がましく眺めていたが、少しして目を凝らし始めた。

「ん？ あれってジョースターさんじやありませんか？ もう一人は

よくわかりませんが……」

美鈴が指した方を見ると、確かに人影が2つ見えた。

「エリナと一人で来たのかしら」

吸血鬼の視力をもつてしても顔を見分けることはできなかつたが、あの二人だということは直感的にわかる。レミリアは、二人の未来に見えた影を思い出してうつむいた。

「美鈴、私はあの2人の運命を変えられたと思う？」

美鈴は首を傾げた。

「さあ。私にわかることは、これまでお嬢様が肩入れしてきた人の運命が悪い方には行つたことがないってことだけですね」

それを聞いたレミリアは、ふつと笑つた。

「そう……ならよかつたわ」

すでにロンドンは水平線の向こうへと消えていた。東へ向かう風が、レミリアの髪をはためかせた。